

ちつきたるが如くなり」と見えたり。●たび 賜ひに同じ。●佐野の舟橋取りはなれし 舟橋は、舟をつなぎて、上に板をしきならべて架したるものなれば、いつにても、取りはなすことを得るものなり。されば、取りはなれしの序に、おきたるなり。さて『万葉集』に、「かみつけぬ佐野の舟橋取りはなし親はさくれどわはさかれかへ」とある歌を引きてかけるなり。

八の巻 解釋

(四頁) ●ラフェット Raphaetの略傳、五の巻(一九頁)にあり。●ガリバルデー Garibaldiは、伊國の豪傑にて、千八百七年生る。少年の時、海軍に入り、自由主義を愛して、放還せられ、千八百三十六年、ツルグエイに共和黨の戦争起りし時、義勇兵として出陣し、その間、一婦人と結婚せり。この婦人、賢明にて、以後よく夫を助けたり。千八百六十二年、終りに以國の大將となり、以國をして歐洲列國間に重きを置かしめたるもの、實にこの人の力なり。

(六頁) ●バンカー岡 Bankerhill は、チャールレストンの郊外にありて、千七百七十五年、米民と英兵との古戦場なり。●ボストン Boston は、合衆國の一都會にて、文學と通商との盛んなる事、諸州に冠たり。●ワシントン Washingtonは、六の巻(五八頁)にあり。●フランクリン Franklinは、米國の政治家にて、また有名なる學者なり。幼より苦學勵行、一日も怠らず、獨立戦争の時、檄文を作る委員となり、また電氣について、空前の大發明をなしたり。爾來、無比の大學者として、世界に名高く、晩年は、非常なる名譽の地位にて、世を終れり、千七百九十年四月歿せり。

(八頁) ● マヂニー Mazzini は、伊國の志士、兼文章家にて、初め法律を修め平素、自由主義を愛し、自國の塊國その他の國より無禮を加へらるるを慨き、奮然として志を立て、終に伊國人をして、自由の思想を充滿せしむるに至れり。● カブール Kabul は、伊國の政治家にて、千八百十年生る。千八百四十八年より、翌年にかけて、塊國との戦の時、或は演説、或は文章にて、伊國を獨立せしむることに盡力し、千八百五十二年には、サルヂニアの大宰相となれり。千八百五十九年、佛國に援けられて、塊國と戦ひ、大いに領地を擴めたり。千八百六十一年歿せり。● カブレラ Caprea 島は、サルヂニー島とコルシカ島との間にある一小島なり。

(一〇頁) ● コルシカ島 Corsica は、地中海中にありて、佛國に屬する一島なり。● サルヂニー島 Sardinia は、地中海中にある一島にて、コルシカ島の南にあり、伊太利に屬せり。山岳多く、地味肥沃なり。

(二八頁) ● 心廣く體胖ユキかに 『大學』にある句なり。

(二九頁) ● 今日こすばあすは云々 『古今集』春に「けふこすばあすは雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましましや」とありて、業平朝臣が久しく訪はで、まれに尋ねしを怨める人に答へし歌なり。● 蹙然たる音 『莊子』徐無鬼に「夫逃虛空者、聞人足音

蹙然而喜矣、而況乎昆弟親戚之警咳其側者乎」と、林西仲の註に「蹙然空中足音之響也」とあり。● まらうど、稀人ヒビの音便、賓客の義。● いひくたす くだすは、朽たすの義、悪しくいふことなり。

(三〇頁) ● 義山が殺風景 李義山の雜纂に、殺風景の目を舉げて「花間喝道、看花淚下、若上舖席、所却垂楊、花下曬禪、游春重載、石筍繫馬、月下把火、妓筵說俗事、果園種菜、背山起樓、花架下養鷄鴨」と書きてすべて風景を殺ぐものといふ。● 山有木工則度之云々 『左傳』隱公十一年に「周諺有之曰、山有木、工則度之、賓有禮、主則擇之」と、杜註に「擇所宜而行之」とあり。● 大津宮の御宇に云云 こは『萬葉集』卷一に「天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山万花之艶、秋山千葉之彩時、額田王以歌判之歌」とあり、その歌に「秋山乃木葉乎見而者、黃葉乎婆、取而會思、奴布青乎者、置而會歎久、會許之恨之、秋山吾者」とて、秋に心を寄せて歌はれたり。さて、大津の宮の御宇とは、天智天皇の御時をいふ。丁卯の歲三月、都を近江の滋賀に遷したまひしによりてなり。また大織冠とは、藤原鎌足朝臣を稱していへるなり。大織冠は、冠を織物にてつくり、繡をもてその縁となせるものにて、孝徳天皇の十三階十九階、天智天皇の二十六階の冠制に、常に上首に置かれたる最高の位冠なり。また鎌足朝臣は、小徳冠御食子の子にて、博學にて器略あり、天智帝

を輔けて、蘇我子の難を定め、制度を建て、中興の偉業を翼賛せし名臣なること世人の知ることなり。●大友黒主 近江の人なり。世々大友の郷に居りしかば、よりて氏とす。また郷滋賀郡に隸するにより、世に滋賀の黒主と稱す。黒主、和歌を善くするをもて著はる。郡の大領となり、從八位上に叙せらる。貞觀中、園城寺延曆寺の別院となるに及び、黒主、神祠別當となりぬ。延喜中、宇多法皇、屢石山寺に幸したまひしに、國司民の勞を憂ひ、法皇の意を損せしかば、黒主、和歌を獻じて聖懷を慰め奉りき。また仁和昌泰の大嘗會に、風俗歌を獻す。後、人祠を郡中に建てて祀り、黒主、明神と稱す。●錦をはれる秋 僧契沖が『萬葉代匠記』に引ける『樹下集』といふものの中に、春はただ花こそは散れ野邊ごと、錦をはれる秋はまされり」とあり。●淺緑花も云々 『新古今集』に、菅原孝標女によめる「あさみどり花もひとつに霞みつる、おぼろにみゆる春のよの月」とあり。●秋は夕と云々 『新古今集』に、藤原清輔の歌に「うす霧のまがきの花の朝しめり秋はゆふべとたれかいひけむ」とあり。●伯仲の間 魏文帝の典論に「傳毅之於班固伯仲之間耳」と『文選』李善註に「伯仲、兄弟之次也、言勝負在兄弟之間不甚相踰也」とあり。

(二一頁) ●古の詔と武との樂を論ずる云々 『論語』に「子謂詔盡美矣、又盡善也、謂武盡

美矣、未盡善也」と集註にいふ、詔、舜樂武、武王樂美者、聲容之盛、善者美之實也、舜紹堯致治、武王伐紂救民、其功一也、故其樂皆盡美、然舜之德性之也、又以揖遜而有天下、武王之德反之也、又以征誅而得天下、故其實有不同者、程子曰、成湯放桀、惟有慙德、武王亦然、故未盡善、堯舜湯武、其揆一也、征伐非其所欲、所遇之時然爾と見ゆ。

(二二頁) ●揖讓 舜征伐の勞をからず、雍容遜讓して、堯の位をうけ天下を治めしをいふ。

(二四頁) ●僧契沖 姓は下河、圓珠庵と號し、字は空心といふ。尼崎の人なり。強記にて、五才の頃、よく『百人一首』『實語教』を暗んせしといふ。僧となり、高野山に上り、兩部大阿闍梨に列す。博覽強記、皇漢佛書殆ど涉獵せざるなく、水戸義公のために、『萬葉代匠記』を著はし、千古の幽を闡き、未發の說を唱へ、遠く斯學の源泉となり、これより國學の面目を一新するに至れり。著書に『古今餘材抄』『厚顏抄』『勢語臆斷』『百人一首改觀抄』『源註拾遺』和字正濫抄』その他數十種あり。元祿十四年、享年六十二にて寂せり。●藤原定家 七の卷(七六頁)にあり。●源俊賴 堀河、鳥羽崇徳の三朝に仕ふ、最も和歌に秀で、熟考苦思して、たやすく語を下さず、題詠を乞ふものありて、その難きを覺ゆれば、まづ子弟をして作らしめ、詞意のやや稚なるものを選びとり、潤色しておのれ

の作とす。およそ、朝廷および諸家の歌合には、俊頼を延きて、判者とす。天治中、敕を奉じて『金葉和歌集』を撰し、また高陽院の命を奉じて『和歌句矜式』を編す。その他『無名抄』『散木髓腦』等の著あり。

(二五頁)●橘千蔭 本書作者略傳にあり●石川依平 遠江の人、通稱爲藏、後に惣太夫と改む。柳園また樞が本と號す。本居春庭の門に入りて學び、名聲世に高かりき。幼より和歌を詠す、その調佳にて成人の如し、伴信友と親しく交り、また近藤芳樹加納諸平等も、互に文書を往復せり。依平その多年勉學の賞として、掛川侯より、終身三人口の俸米を賜はりたり。安政六年歿す、年六十九。著書に『姓氏錄同祖部類』『万葉新採百首續篇』『柳園集』等あり。●仲田顯忠 徳川幕府の士にて、いはゆる旗下の列なりき。通稱は、藤右衛門といひき。文政・天保頃の人歌をよくせり。●藤原俊成 世に五條の三位と稱し、剃髮して釋阿といふ。人となり、寛厚にて和歌を善くし、藤原基俊に従ひ學ぶ。居常和歌を作る。古淨衣を被て、桐火桶を擁し、靜座して情容をなさず。後白河天皇の敕を奉じて、『千載和歌集』を撰し、建仁三年には、九十の賀和歌所に賜ひ、御製の和歌並に鳩杖を賜ふ。寵遇實に異數なり。著書に『古來風體抄』あり。家集を『長秋詠草』といひ、六家集の一なり。元久元年、享年九十一にて薨せり。

(二六頁)●村田春海 本書作者略傳にあり。●凡河内躬恒 和歌を能くし、貫之・忠岑等と共に敕を奉じて、『古今和歌集』を撰す。醍醐天皇かつて躬恒を階下に召して、問ひたまふに、月を弓はりといふ。こころは、なにの心ぞ、これがよしつかうまつれとおほせ事ありしかば、てる月を弓張りとしもいふ事は山邊をさしていればなりけりと申したるを、御感斜ならず、御衣を賜はる。また家に櫻樹ありて、花候には、賓客堂に滿つるばかりなりしが、花散らば、また來訪するものなからむと、よりて、世態に感じて、『わが宿の花見がてらにくる人はちりなむのちぞ戀しかるべき』の詠あり。世にこれを傳稱す。●小澤蘆庵 七の卷(三四頁)にあり。●井上文雄 通稱玄眞、柯堂。また歌堂。また調鶴と號す。田安家の侍醫たり。少より和歌を好み、初め岸本由豆流の門に入り、後一柳千古を師とし、頗る皇典に通じたれども、最も歌文に長せり。明治四年十一月歿す、年七十六。その著の『大和物語新註』『八代集評論』等二十餘種あり。

(二七頁)●藤原興風 藤原濱成の孫にて、道成に至り、河内大椽となり、六位に叙せらる。その歌は、世々の撰集に載せらる。●俊基 後醍醐天皇の眷遇をうけ、藏人頭に補せらる。藤原資朝と共に武家討伐の謀を運らす。潜に修驗者となりて、諸國を周遊して、志士と結び、また無禮講と稱し、僧玄慧をして、書を講せしめ、潜かに謀る事あり。事

泄れて捕へられ、幾もなくしてゆるされしが、再び捕へられて遂に害せらる。

(二八頁) ●落花の雪 これより以下有名なる道行の文なり。『新古今集』俊成卿「またやみむ片野のみの櫻がり花の雪ちる春の曙」の詠あり。●片野 河内國交野郡にありて、櫻の名所なり。●櫻がり 狩は、狩獵の意より轉じ、櫻の花を見る義となれり。●紅葉の錦 『拾遺集』藤原公任卿「あさまだき嵐の山のさむければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」の詠あり。衣錦は、『漢書』に、朱買臣が會稽の郷に歸りし時の故事に原けるなり。(二九頁) ●打出の濱 江州志賀にあり、逢坂の關より東十町許なり。●勢多の長橋 近江志賀郡栗太郡の堺にあり。『風雅集』に、兼盛の歌に、「みづきものたえずそなふる東路の勢多の長橋音もとどろに」とあり。●うねの野 古歌に、「近江路を朝たちくればうねの野に田鶴ぞ鳴なるあけぬこの夜は」とあり、うは、憂のうを兼ぬ。●森山 江州野洲郡にあり、守山とも書く。『古今集』に、貫之「白露も時雨もいたくもり山の下葉残らず色づきにけり」の歌あり。●鏡山 森山より東北なり。『古今集』雜に、大伴黒主「鏡山いざ立よりて見て行かむ年へぬる身は老やしぬるを」の詠あり。●篠原 近江國野洲郡にあり、鏡の山の西の麓に當る。●老蘇森 近江國蒲生郡にあり。老曾とも書く。壬生二品家隆の、旅ねして結ぶ衣もあはれなり。老蘇の森の松の下草などの歌あり。駒

に下草を食はせむとて止めたるなり。●番馬醒井柏原 いづれも近江國坂田郡にあり。●不破 美濃國にあり。『新古今集』雜の攝政太政大臣良經の歌に、「人住まぬ不破の關屋の板尻荒にし後はただ秋の風」●なほもるものは秋の雨 關守の守ると雨の漏るとをかけたなり。秋の雨とつづきは、その雨の草木を凋落せしむるものなれば、下文わが身の尾張といひかけたなり。●八劍 尾張國愛知郡に鎮座まします熱田神宮の社内に八劍神社あり。●鳴海瀉 尾張にあり。『夫木集』常磐井入道の歌に、「打渡す今か鹽干になるみ瀉とをよる舟の聲も通はず」とあり。

(三〇頁) ●濱名橋 元慶八年に造れり。長五十六丈高一丈六尺なりとぞ、今はなし。遠江國濱名郡橋本村にあり。橋の本なぞと、歌詠多し。●池田 遠江國天龍河の東岸にあり。古はその西岸にありき。古人の紀行多くは池田宿に泊りて、天龍川を渡ると書きたり。今は川瀬變せしなり、參議通資の歌に、「そのかみの里は河瀬となり」にけり。ここに池田の同じ名なれど。●元曆 後鳥羽天皇の年號。●重衡 平清盛の子。この事、『源平盛衰記』には、内大臣宗盛が下向の時の事とせり。●長者の女 この宿の長者湯谷が女にて、侍従といへり。歌を善くす。この時、重衡の返歌に云く、「故郷は戀しくもなし旅の空都もつひのすみかならねば」。●小夜中山 遠江國にあり。『新古今集』西行法

師が歌に、年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山とあり。

(三一頁) ● 隙行駒の足はやみ 『史記』第三十の魏豹の傳に、人生一世如白駒過隙とあり。足はやみは「足はやさに」と譯すべし。● 亭午 正午なり、杜詩に、亭午頗和煖とあり。

● 菊川 遠江國榛原郡菊川村あり、昔は驛場なりしが、後立場となれり。またここに菊川といふ川もあり。● 承久の合戦 後鳥羽院の武家征伐を企てたまひし時、官軍と北條氏との合戦なり、時は順徳天皇承久三年なり。● 院宣書きたりし咎 承久に院宣を書きしは、光親卿なれども、菊川にて四句を書きしは、中納言宗行なり。今この兩事を混じて書けり、誤なり。● 光親卿 權中納言藤原光雅の子なり。● 南陽縣菊水 支那南陽縣に谷あり、谷中の水甘美なり、上に大菊ありて、水に落つ。これを汲むもの壽を延ぶといへり。

(三二頁) ● 大井川 遠江駿河の堺にあり、大堰河または大猪河とも書けり、京都桂川の上にも同名あれば、都にありし名をきくとはいへるなり。● 龜山殿の行幸 龜山殿は、都の大堰川の邊にあり、後醍醐天皇の行幸をいふ。● 龍頭鷓首 樂人の乗れる船なり、龍は能く水を涉り、鷓は風を得て疾く行く水鳥なるがゆゑに、船先に龍頭または鷓首を彫つけたる船を作りしものなり、或は水患を避くる故ともいへり。● 島

田藤枝 いづれも共に駿河國志田郡にあり ● 岡邊 岡部とも書く、藤枝と丸子との間にあり、冷泉爲家卿の歌に、歸りくる程はなけれど朝霜の岡部の眞葛うら枯れにけり。● 宇都の山 岡邊と丸子との間にあり、駿河の安部郡に屬す。● 業平の中將 七の卷(一五頁)にあり。● 夢にも云々 『伊勢物語』にいはく、ゆきゆきて駿河の國にいたりぬ、宇津の山にいたりて、わがゆかむとする道は、いとくらう細きに、葛楓は茂り、心細くすすろなるを見る如く、思ふに、修行者あひたり、かかる道に、いかでかいまするといふを見れば、見し人なりけり。京にその人の御もとにとて、文かきてつく、駿河なる宇津の山邊のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり。● 清見瀉 駿河の海邊にて、富士の裾に當る。古へ關所あり、今の清見寺の内、その古跡といひ傳ふ。● 三穂が崎 三保或は御穂とも書く、駿河國有度郡にあり。ここに松あり、三保松原といひ、古詠多し。● 奥津 息津または興津、沖津などとも書けり、駿河國宇度郡にありて、風景よろし。● 神原 蒲原とも書く、奥津より二里餘の處に、由井の宿あり。ここより一里にて、神原に著す。● 上なき思ひに 『新古今集』家隆の歌に、富士の根の烟はなほぞ立ちのぼる上なきものは思ひなりけり』の詠あり。

(三三頁) ● 浮島が原 富士の南にあり。● おりたつ田子の云々 『源氏物語』葵の卷御

息所の歌に、袖ぬるる懸路とかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞうきとあり。田子は、農夫の意なり、その田子に、田子の浦をきかせたり。田子の浦は、清見奥津より、東浮島原迄の海邊の總名なり。●車かへし 駿河國駿東郡沼津の北に當れる地名なり、車返と書く。●竹の下道 富士の裾野にある地名なり、建武二年、新田足利の兩軍二ヶ所にて戦へり。●足柄山 愛鷹山にて、また蘆高・足高とも書く、富士に連る高山なり。この山を経て、箱根山にかかり、その間に横走關・足柄關ありしなり。●大磯小磯 大磯は、相模國陶綾郡にありて、今も名高し、小磯は、それより同國足柄下郡酒匂によりたる磯邊をいふ。●こゆるぎの急ぐ こゆるぎは、こよろぎといふべきを、普通にてしかもいへり。『倭訓栞』には、く、催馬樂の歌より出で、源氏に「あるじはさかなもとむとこよろぎのいそぎありく」と見えたり。小餘綾コヨロギの磯といふを、いそぎといひかけたるなり、餘綾は、相模の郡名なり。『倭名鈔』にも、よろぎとよめり、綾は「りよう」の音なるを「ろぎ」とよむは、「りよ」反「ろ」なり、「う」を朝鮮に「き」とよむなりといへり。磯も「倭名鈔」に、伊蘇とみえて郷名なり、今の大磯小磯これなり。

(三四頁) ●物にぞあたり云々 狼狽して前後を亂し、物たつきあたるほどのさわぎなりとなり、あわてまどへるをいへるなり。

(三五頁) ●保元のためしにや云々 保元の亂、崇徳上皇を讃岐に遷し奉れる例によりて、上皇を遠島にうつし奉らむとなり。●女院 七條院・承明門院・修明門院などをいふ。●本院 後鳥羽上皇なり。●ものにもがなや 『源氏物語』帚木の卷の引歌に、「とりかへすものにもがなや世の中をありしなからわが身を思へば」とあるをとれり。●信實朝臣 信實は、右京大夫藤原隆信の五男にて、正四位下左京權大夫となり、出家して寂西と號す、父子みな似繪に名あり。●七條院 後鳥羽上皇の御母藤原殖子をいふ。

(三六頁) ●新院 順徳上皇なり。●四十五とかや云々 『史記』始皇本紀に、子嬰爲秦王四十六日、楚將沛公、破秦軍入武關、遂至霸上、使人約降子嬰、子嬰即係頸以組、白馬素車、奉天子璽、降軹道傍、とあるをいへるなり。

(三七頁) ●中院 土御門上皇をいふ。●承明門院 内大臣源通親の女、後鳥羽天皇の宮に入り、土御門帝を生む、准三宮となり、正嘉元年薨す、年八十七。●のどかにて云々 われひとり、心しづかに都に留り給はむことは不孝の恐れあれば、御自身の御心より、遠所に移らむことを望ませられしをいふ。●ふぶきして 吹雪にて、風まじりにふる雪をいふ。

(三八頁) ●承平の將門 朱雀天皇承平五年、平將門東國に反し、叔父國香を攻殺し、近隣を平げ、下總猿島に偽宮を築く、天慶三年誅せらる。●天慶の純友 天慶の始、藤原純友、南海にて海賊をなし、遂に將門に應じ、國司を殺し、官物を掠奪せしが、同三年誅せられぬ。●康和の義親 堀河天皇の康和四年十二月、對馬守源義親鎮西に横行せるにより、隱岐國に流さる。義親配所にありて、人民を略し、官物を奪ひしかば、平正盛に勅して、これを追討せしむ。●御裳濯川云々 天皇の御系統をいふ。みも濯川は、伊勢内宮の前を流るる川なり。内宮は、天照大神の鎮り坐す所なれば、その御系統を、やがてしかいへるなり。さて、御兄弟にて、同じく天照大神の御系統にましませば、いづれ御輕重の別なくてあるべけれど、なほ時のみかど、後白河天皇を助け給ふとなり。

(三九頁) ●信賴の衛門督云々 平治の亂をいふ。●三上皇今上 三上皇は、後鳥羽土御門順徳の三上皇、今上は、仲恭天皇を申すなり。●あやなきわざ云々 無文の意にて、物の區別なきをいふ。かく官軍敗れて、三上皇の遷されたまふなど、大義に背き黒白のわかちなきをいへるなり。

(四〇頁) ●こやの云々 昆屋野は、攝津國島上郡にあり。さて、この詞は、『後拾遺集』和泉式部の歌に、津の國のこやとも人をいふべきにびまこそなけれ、葦の八重ぶきとありて、葦にて幾重にもふける屋のひまもなきによせていへるをとれるなり。●菟姑射の山 仙人の住處なるを、やがて仙洞御所にいへり。霞の洞も上皇の御所にて、院のかぎりなくさかえさせたまふさまをいへり。

(四一頁) ●柴のいほり云々 この文、『新古今集』に、西行法師の歌に、いづくにもすまれずばただすまであらむ柴のいほりのしばしなる世にとあるによれり。

(四二頁) ●水無瀬殿おぼしいづる云々 上泉水無瀬に離宮をつくりて、屢御幸ありし事、『増鏡』おどろの下の卷に見えたり。●海の眺望云々 隱岐の國より海上を眺めやるけしきを、白樂天の詩に、三五夜中新月色、二千里外故人心とあるをとりてのべたるなり。いまさらめきたりとは、このけしきにつきて、この詩の風情を思ふも、今更のやうにおぼゆとなり。●能因法師 姓は橘、名は永愷といひ、文章生となり、肥後進士と號して、和歌を嗜み、藤原長能につきて、作歌の要を問ひ、師弟となる。歌道に師弟あるは、これより始まる。その都をば霞と共にいでしかど、秋風ぞふく白河の關てふ歌は、世傳へて絶唱とす、『玄々集』八十島の記等の著あり。

(四三頁) ●西行法師 七の卷(一七頁)にあり。●間宮永好 通稱一郎、松の屋と號す。水戸の人なり、小山田與清の門に入りて學び、最も和歌に長じ、また筆札に妙なり。その

妻八十子も、また和歌文章に達す。永好、明治の初年、神祇大史に任せらる。明治五年正月三日歿せり、年六十八。『万葉集長歌部類』『同類語』『同地名抄』『古今新註』『八代集類語』『職原抄新註』等、二十餘種あり。

(四四頁) ●高崎正風 本書作者略傳にあり。●僧正遍昭 遍昭は、百人一首中の歌人なり。良峰宗貞と稱す。安世の子なり。仁明帝、宗貞を愛す、その崩するに及びて、乃ち僧となり。叡山に登り、慈覺大師の弟子となる。元慶三年、僧正に任じ、元慶寺の座主となる。花山僧正と稱す。寛平二年寂す、年七十四。●俊成女 通具の妻なり、歌名よし。父の女たるに恥ぢず、父の『千載集』を撰むや、大いにこの女の助けたる所ありといふ。●源頼政 七の卷(一六頁)にあり。

(四五頁) ●仲田顯忠 八の卷(二五頁)にあり。●千家尊孫 今の東京府知事千家尊福男の曾祖父にて、最も和歌に秀でたり。●八田知紀 七の卷(一七頁)にあり。

(四六頁) ●莊周が夢 『莊子』内篇齊物論に、昔者莊周夢爲蝴蝶、栩栩然蝴蝶也、自喻適志、與、不知周也、俄然覺、則遽々然周也、不知周之夢爲蝴蝶、與、蝴蝶之夢爲周、與、周與、蝴蝶、則必有分矣、此之謂物化とあり。●蛙は古今序 『古今和歌集』紀貫之の序に、花になく、鶯水にすむ蛙の聲をさけば、生とし生けるもの、いづれか歌をよまざりける云々とあり。

り。●古池に飛び云々 有名なる芭蕉翁の「古池にかはづとびこひ水の音」の句をいへるなり。こは廢宅の寂寞たるさまをよめるなり。俳道にては種々秘説ありといへど信すべからず。

(四七頁) ●やがて死ぬ これも芭蕉翁の句に「やがて死ぬものとは見えず、蟬の聲の句をいへるなり。こは翁がその弟子秋の坊に無常迅速の理をさとしける句なり。●貧の學者 『晋書』に、車胤字武子、幼恭勤博覽、貧不常得油、夏月以練囊盛數十螢、火照書讀之、以夜繼日、後官至尙書郎」とあり。

(四八頁) ●槐安の都 『異聞集』に、淳于棼家居廣陵、宅南有古槐樹、棼醉臥其下、夢二使者曰、槐安國王奉邀、隨使入穴中、見榜曰大槐安國、其王曰、吾南柯郡政事不理、屈卿爲守理之、棼至郡凡二十載、使送歸、遂覺、因尋古槐下穴、洞然明朗、可容一榻、有一大蟻、乃王也、又尋一穴、直上南柯、即棼所守之郡也」とあり。●螻螂のやせたるも斧をもちて云々 陳琳の書に、欲以螻螂之斧、禦隆車之隧とあり。叶はざるながらも威勢よきをいふ。

(四九頁) ●われから 藻に生ずる蟲の名『古今集』に、あまの刈る藻にすむ蟲のわれからとねをこそな、かめ世をば恨み」とあり。●七賢 竹林七賢のことなり。晋の阮籍、嵇康、山濤、劉伶、阮咸、向秀、王戎の七人、山陽に集り、竹林に遊び、意を肆にし、酒を飲む、世

に、これを竹林の七賢人といふ。

(五〇頁) ●直島 讃岐の海上小豆島などのある邊にて、豊島といふ島の西にあり、周回四里餘なり。●故郷に言つてせまほしく 雁にことづけて、京へ御音信なされたく思召すといふ義。この夜の雁云々は、漢の蘇武の故事を思ひてかけるならむ。

(五一頁) ●粉楡の居 仙洞御所をいふ。また社をいふ。『漢書』郊祀志に、高祖禱豊粉楡社、註に、粉楡、郷名也とあり。よりにて故郷の義とす。張衡西京賦に、豈伊不懷歸于粉楡。●先院 鳥羽院。●金谷 晋の石崇が園の名なり。崇一日賓客を集め、大いに酒宴を催し、詩を賦す。もし詩成らざるものは、罰酒三杯を飲ましめたりと。●鳥の頭白くなるとも云々 あり得べからざる事の例なり。白頭鳥といふ語は、『事文類聚別集』に、燕太子丹、秦に質たりし時、秦不禮なりしかば、歸らむことを求めぬ。秦王、鳥の頭白く、馬に角生ずるを待ちて、子を歸へすべしといひぬ。太子天を仰いで哭せしかば、白頭の鳥、角ある馬、忽ちに出で來れり。これによりて、秦王大いに驚き、丹を歸らしめきとある。これなり。『史記』にも見ゆ。『後撰集』に、山鳥頭も白くなり、にけりわがかへるべき時はきぬらむとあるも、この故事を詠めるなり。●望郷の鬼 他郷にて死にたるものの靈が、その郷土を戀しく思つて、常に故郷を望み居るをいふ事なり。●五部の大乘經 華

嚴經、大集經、大品般若經、法華經、大般涅槃經をいふ。●貝鐘の音も聞えぬ所 よき寺もなき所といふ。寺にては貝をも吹き鐘をもならせばなり。●五の宮 鳥羽天皇の第五子覺性法親王なり。

(五二頁) ●懺悔 ざんげとよむ、衆失を披陳するを懺といひ、過咎を發露して、隠し諱まざるを悔といふ。ここにては、前惡を悔いて、その罪を滅さむためにと心得べし。●回向 誦經法事などの功德を廻らして亡者に向はしむるを回向といふ。換言すれば、亡者自身の死後も同じのために功德を修するなり。ここは、その功德を悪しき方に向け、惡事の輔とならしめたまはむとする事をいふ。

(五三頁) ●康賴 參考本に、『千載集』を按ずるに、平判官康賴に作れりとあり。●志戸 讃岐國寒川郡に志度村あり。●白峯 同國阿野郡にあり。

(五四頁) ●ももしき もも石敷にて、皇城の堅固なるを石に譬へまつりて、大宮にかけていふ、轉じて禁中をもいふ。●十善の君 殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡の十惡を犯さざるもの天子に生まるといふより、天子をかくいふ。●三界 佛説の欲界、色界、無色界の三界をいふ。●火宅 佛教の語。この世の安からぬを、恰も火の燃えてゐる家の如しとたとへていふ語。●九品 極樂淨土に上品、上生、上品

中生より以下、下品下生まで九等ありといふ。

〔五五頁〕●圓位 西行法師の號なり、西行法師の略傳は、七の卷(一七頁)にあり。

〔五七頁〕●藤原敏行 富士麻呂の子なり、從四位上左近衛中將となる。書をよくし、和歌に工みなり。村上帝、かつて小野道風に、古今妙書の最なるものを問ひしに、道風空海敏行を以てせりといふ。●伊勢 伊勢守藤原俊蔭の女にて、宇多天皇の皇后なる。七條の後温子に仕ふ。伊勢とは、伊勢の守の子なるによりて、しかよべるなり。後に宇多天皇に召されて、行明親王を産み奉りたれば、伊勢の御息所或は伊勢の女御と稱す。歌はかの六歌仙の一人なる小野小町とむかへて、常に伊勢小町と並び稱せらる。〔五八頁〕●契沖阿闍梨 八の卷(二四頁)にあり。●和泉式部 越前守大江雅致の女、和泉守橘道貞の妻、和歌を巧みにす。道貞の死後、上東門院に事へ、再び藤原保昌に嫁す。●村田春野 春門の男、河内の國牧岡の祠官鳥門大路某の養子となり、中務といふ。著書に『詠歌大概抄』『永言三體』『百人一首私抄』等あり、その歿年月詳ならず。

〔五九頁〕●良暹 父祖詳ならず、『袋草紙』に、人々大原なる處に遊びゆくに、各騎馬なり。然るに、俊賴朝臣、俄に下馬せらる。人々驚きてこれを問へば、こは良暹が舊房なり、いかで下馬せざらむやと、人々感嘆して皆下馬すとあるにて、當時世に尊ばれたる

歌人たることしるべし。●香川景樹 本書作者略傳にあり。●藤原定家 七の卷(七六頁)にあり。

〔六〇頁〕●矢野常方 會津の藩士にて、鎗術に長じ、また和歌をよくせり、該藩にての有名なる歌人なりき。●大田垣蓮月 明治八年歿す、年八十三。その傳、本書二の卷(一五)にあり。●紫式部 七の卷(三二頁)にあり。

〔六一頁〕●馬港 マルセイユ港をいふ。●里昂 リオンとよむ。馬港と巴港との間にある大都會なり。●ドーバアカレイ Dovercalis は、英國より海を渡りて佛國につく第一の良港なり。●ゼネバ Geneva は、瑞西の都會にて、人口七万餘あり、時計製造の業甚だ盛んなり。

〔六二頁〕●ベルサイユ Versailles の宮殿は、ルイ十三世の原基に據り、ルイ十四世の増築せしものにて、その經營十億万フランクを支出せしなれば、その壯麗なること思ふべし。●ルイ十三世 Louis XIII は、ヘンリー四世の子、一千六百一年に生る、母后攝政として、十歳の時位に上る、在位間、國家多事にて、新舊教徒の戰爭あり、リヂェリウ宰相となるに及び、三十年戰爭あり、朝權大いに衰へたり、一千六百四十三年崩す。●ルイ十四世 Louis XIV は、佛國王にて、千六百三十八年九月生れ、五歳の時、王位につき、才

略に富み、銳意政略をもて國政を謀り、在位間、佛國の文藝大いに進歩し、英主の稱あり。然れども、驕奢抑壓を事とし、終に古來未曾有の大改革の起る原因をなせり。●ルイ十八世 Louis XVIII は、一世ナポレオンの敗北後、王位のポールボン家に歸したる際位につけり。佛人は、既に戰爭に疲れて、偷安の傾きあり、ルイ十八世の治世は、これのために事なきを得たり。

(六四頁) ●ルイ十六世 Louis XVI は、ルイ十五世の子、千七百五十四年生る。米國獨立戰爭に際し、貴族僧侶の反抗に遇ひ、人氣を失し、遂に英國に追はれ、後佛國の改革黨起りて、千七百九十三年正月二十日、斷頭臺の露と消えぬ。●ポールボン家 Bourbon 家は、千五百八十九年、佛國ヘンリー三世刺客に殺されし時、ナポール王の立ちて佛王の位につけるに基づく、これヘンリー四世なり。それよりポールボン王統、久しく續けり。●ルイヒリップ 千七百七十三年十月生れ、佛國皇帝として英明の譽あり、國家大いに富みぬ。されど、貴族にて國會を堅めむとせしにより、非難の聲大いに擧り、改革の論盛んに起り、王遂に逃れて英國に行き、一千八百五十年歿しぬ。

(六五頁) ●ウイヘルム Wilhelm は、有名なる鐵血宰相ビスマルクを擧げて宰相とし、大いに國政を改め、千八百七十年、佛國と戦ひてこれに勝ち、五十億フランの償金

およびアルサス・ローレンスの二州を得て、千八百七十一年一月、佛國のベルサイユの王宮にて、日耳曼皇帝の位に上れり。

(六六頁) ●顯理五世 Henry V は、一千三百八十七年生る。夙に佛國の王たるを請求し、一千四百十五年、みづから海陸の大軍を率ゐて佛國を侵し、遂にこれを征服せり、一千四百二十二年崩じぬ。

(六八頁) ●オルレアン Orleans は、パリ府の南ロアール河の流域にある一都會なり。●シノン Chinon は、オルレアンよりロアール河に沿ひ西に下りたる所にある一都會なり。

(七〇頁) ●レーム府 Rhims は、パリ府の東北部にある一都會なり。●火刑 ジャンダークは、種々吟味の上、様々の體罰を受け、遂に一千四百三十一年五月三十日、火刑に處せられぬ。

(七三頁) ●清水濱臣 本書作者略傳にあり。●賀茂真淵 七の卷(一七頁)にあり。

(七四頁) ●加納諸平 本姓は夏目氏、通稱は小太郎、遠江國濱名郡白須賀の人、夙に和歌をよくす。十四歳の時、紀伊國の醫師加納伊竹の嗣子となり、餘暇もて本居大平に學ぶ、詞藻豊富にて、名聲大いに著はる。藩命を承けて、『紀伊風土記』を始め、諸書を撰む。

また藩に請ひて、國學所を設け、その教授となる。安政二年六月廿四日歿す、年五十二。
 ●香川景樹 本書作者略傳にあり。●寂蓮法師 藤原俊成の養子なりしが、定家生るるに及び、避けて僧となり、寂蓮と稱す。和歌に巧みなるにより、名高し、建仁二年七月二十日歿す。●荷田春滿 本姓は羽倉氏、東麻呂と稱す。有名なる國學者にて、國學の復古を唱へ、國史律令格式古文古歌いづれも精通せざるなし。特に國史神代の巻と萬葉集との上に、一家の説を立つ。また中世以降和歌の淫靡に傾けるを矯めむと欲し、生涯純粹の戀歌を詠せず。元文元年七月二日歿す、年六十九。

(七五頁) ●八田知紀 七の卷(一七頁)にあり。●春道列樹 土御門順徳帝時代の歌人なり、紀元千五百八十年歿す、作歌は多く、『古今集』『後撰集』等に載せらる。●平兼盛 七の卷(一六〇頁)にあり。

(七六頁) ●千家尊澄 東京府知事千家尊福氏の父なり、夙に皇學和歌に長じ、山陰道中、本居門下として傑出せるものなりき。明治十一年八月廿一日卒す。『松壺文集』和歌の浦鶴』の著あり。●南都の餘燼 治承四年、南都の僧兵奈良坂般若坂によりて平重衡と戦ふ、重衡これを破りて南都に入り、東大寺を焼きたる事をいふ。●墨股の勝鬨 清盛の薨後いまだ五旬を経ざるに、平知盛三萬騎を率ゐて美濃國安八郡なる

墨股にて、源軍六千餘騎と合戦し、大いにこれを敗りぬ。

(七七頁) ●六波羅 京都市下京區にて鴨川の東、七條以上五條松原通以南の邊、初め平忠盛この邊に方一町許の邸宅を有せしが、清盛に至り、一門臣屬の亭館を増築して、二十餘町五千二百餘宅の多きに達せりとぞ。壽永二年、平氏西奔の時、一炬灰燼となりけり。●椒房 古語に、以椒塗壁取其溫而多子稱椒房云々。蓋し、皇后皇妃の寢所をいふ。

(七八頁) ●直衣 官服の名地と紋との外は、皆袍に同じ。古四位以上の人といへども、なほ許されざれば、著られざりしもの。烏帽子指貫と共に用ひたり。●束帶 正服の裝束の稱、冠袍石帶下襲、劔笏等を具ふ。●三軍 すべて軍勢を前軍中軍後軍に分つ、されば、三軍といへば、總軍勢の事なり。

(七九頁) ●柳の五衣 柳は、表白にて裏の青をいふ、夏季は、これを卯の花といふ。五衣は、表著の下に著るものにて、五つ重ねたるをいふ。五つとも、おほくは同色なり。さて、著る時は、下の紅の單をき、上に、表著と唐衣とをきる例なり。●建禮門院 高倉天皇の中宮、平清盛の女、平徳子と申す、安徳天皇を生む。文治元年、安徳天皇と共に海に投じ、源氏のために鈎せられて京師に還り、薙髮して眞如覺と號す。建保元年十二月薨

す、年五十七。

(八一頁)●判官 源義經なり。●島山 島山重忠なり。●御誕 おほせといはむが如し、貴人の命令をいふ。

(八二頁)●紺村濃 白地に紺色にて、所々濃くしたる染色なり。●緋絨の鎧 緋の染革にて緘したる鎧をいふ。緋は、紅花にてそむるなり。赤革とは、別なり。赤革は、茜にて染むるなり。

(八三頁)●國母 皇太后をいふ。●北政所 『故實拾要』に「北政所はこれ關白の妻なり。但し、これは蒙宣下稱也」とあり。●几帳 衝立に帷を垂れたるが如きものにて、女房などの傍におきて、人に見えぬやうにするもの。●虚焼 夕陽の西方の空に赤く照り渡ることなり。

(八四頁)●沛艾の馬 『藤添盛囊鈔』に「人ヲハイカイナド云フハ何事ゾ」『文選』ニ沛艾ヲドリアガルトヨム、馬武クシテ、寄ル者ヲクヒフムニ寄テ、人ヲモ云フカ、馬ノ半漢狂ヲ云フ詞ナリ』『徒然草』に「御隨身秦重躬、北面の下野入道信賴を落馬の相ある人なり。よくよく慎みたまへといひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信賴馬より落ちて死にけり云々、きはめてももじりにして沛艾の馬を好みしかば、この相をお

はせはべりき」と見えたり。●南無歸命頂禮 佛に祈る詞なり。南無は梵語、歸命と譯す。一心に佛に依頼する心、頂禮は、頭を地にすりつけて拜禮することなり。

(八五頁)●十三束二つ伏 十三握と指二本の巾丈けの長さをいふ。●鏑矢 矢束の先に鏑をつけたる矢なり。鏑とは、鹿角またはアラメの根かぶ、またヒヒラギにても作る。これに穴ありて、矢の飛び行く時、これに風入りて鳴る。この鏑のさきには、雁股の鏑をすげる由、『五武器談』に見ゆ。

(八六頁)●漆の浮洲 ミヲツクシ(水脈の串)の立ちたる浮洲のこと、矢をミヲツクシに比していへるなり。●女房、男房 『安齋叢書』に「古代女のことを女房といふは、仕官の女の中にも、品宜しき人は、人と相住をせず、一人住の房を賜はりて住む位の女をいひしなり。男房の事は、藏人をさしていふなり。藏人の職は、天子の御身近く、親み召仕はるるものにて、御側の女房と同様なるものゆゑに、女房になぞらへていひたるなり」と見えたり。されど、ここは男女の官人をおしなべていへるなり。

(八七頁)●白駒馬 サメウマと讀む。馬の鼻まはりの淡赤きをいふ。

(八九頁)●君君たる人を得ば 『荀子』臣道篇に「君君則臣臣とあるによれり。●刀自とぬし(戸主)の轉じたる語なりといふ。『和訓栞』に「婦人の通稱なり」とあり。『万葉』には

はとじ、おもとじといへるは老女の稱なり。『日本書紀』に大人をおほとじと訓じ、轉じて人に仕へてその家事を掌る婦の稱ともなり、また女官の稱ともなれり。

(九〇頁)●禰宜 祈の義、神に仕ふる人にて、神主の下に祝部、巫頭等と共に神供祈禱、祓除神樂等の事を掌るものなり。

(九一頁)●句不驚人死不休 杜甫の句なり。●近衛殿 舊公卿從一位前關白忠熙公。

(九四頁)●敷島の道 和歌のことをいふ。西行の歌に「人毎に一つの癖はあるものをわれには許せ敷島の道」とあり。●擅長 擅は專なり、専ら長じたるをいふ。

(九五頁)●權輿 事物の始めをいふに用ふ。蓋し、權は衡の錘なり。衡を作る、まづ權より始む。輿は、車の「コシ」なり、車を作る、まづ輿より始むるによりて、事物の始めの義となす。●濁るとも云々 大江廣元は、朝廷の臣にてありながら、頼朝のために朝廷の古文書記録類を携へて鎌倉に赴き、遂に鎌倉幕府を創立せしめたる心事の清濁正邪知られざるをいへるなり。

(九六頁)●和歌の浦云々 赤人の歌に「和歌の浦に鹽みちくれば濁をなみあし邊をさしてたづ鳴き渡る」とあるによれり。●白川の清き流 清盛の母は、白河帝の宮女なりければ、しかいへるなり。●本居春庭 通稱健藏、健亭と號す。世に後の鈴の屋と

稱す。宣長の男、資性强記絶倫、父の後を嗣ぎて古學を修め、特に語學に精しく、和歌をよくす。若年にして、明を失ひ、替者となる。然れども、素志を捨てず、傍ら父を補けて子弟を教授せり。文政十一年十一月歿す。年六十九。●心つくしの浮雲 心つくしに筑紫をかけ、浮雲を左遷せられしことにかたり。●魁つべき梅の花 梅の花に梅田雲濱をかけ、梅花は花中の魁といふより、勤王の魁にいひかけたり。

(九七頁)●屋代弘訓 通稱を權太夫また式部といひ、寛居と號す。伊勢外宮の禰宜なり。本居春庭および大平に學び、また成島司直、狩谷掖齋、北靜廬、屋代弘賢、朝川善庵等と往來して見聞を廣くしたり。安政四年十一月五日歿す。年七十三。●八田知紀 七の卷(一七頁)にあり。

(九八頁)●小松 小松内大臣重盛にかけていへるなり。下句平らかに平氏をかけた。●楠木の小枝は 小楠公正行をいひかけたり。なき數に入るとは、小楠公の歌をよみ入れたるなり。●壁の中より云々 『孝經』をいふ。『古文孝經』孔安國の序に、魯の恭王、人をして、孔子の講堂を壞たしめしをり、壁中の石函にて、『孝經』を得たりと記せる、これなり。

(九九頁)●水莖の岡の云々 水莖とは、草などの生き生きと榮えたる莖幹をいひて、

岡といふことをいはむために置けるなり。かかる類の詞を枕詞といふ。また筆のこ
とをも水莖といへば、下の書くといふに縁故あらせむとてかくいへり。葛は蔓草に
て、その葉は風によくうら返るもの故、かへすがへすといふことをいはむために置
けり。さて、この條と次の條とは、古歌に「水莖の岡のくす葉をふきかへしおも知る兒
等がみえぬころかも」また「かひなしとおもひな消ちそ水莖のあとぞ千年のかたみ
なるべき」とあるなどによりて書けり。●神樂のことば云々　これは故事を擧げた
るなり。その故事は、神代の昔、須佐之男命といふ神ましまして、御心に協はざるこ
わりしかば、天照大御神の田地宮殿等を損じ、暴行をなしたまへり。大御神怒りて天
岩窟の内に閉籠りたまひ、世の中闇くなりしを、四方の諸神歎きて、種々の物を作り
設け、音楽を奏して大御神を岩窟より出だし奉れり。その時、世間明かになりしかば、
諸神諸共に、「あはれ、あな、おもしろ、あなたのし、あなさやけおけ」と謠ひたまひきとい
ふことなり。神樂の詞は、音楽を奏せし時、謠ひし詞をいへるなり。

(一〇〇頁) ●二たび勅をうけて云々　二度勅を受けて世々にきこえあげたるは、爲
家の父、定家卿。二たび勅を奉じて、『新古今』、『新勅撰』の二歌集を撰び、爲家卿もまた『續
後撰』、『續古今』を撰ぶ。その御代は、土御門四條後深草龜山、四天皇の御時なり。●三人

のをのこ　阿佛尼の子五人あれど、爲相爲守二人のほか僧と女子となれば、三人は
誤なるべし。●細川の流云々　播磨國細川庄を何の理由もなく、爲氏に奪ひ取られ
たるをいふ。●もろともに消えをあらそふ　佛前の燈火と母子の生命と、いづれも
絶えむとして、たゆることの前後を争ふありさまなりとなり。燈火の縁故によりて、
生命のたゆるをも消ゆとはいへるなり。

(一〇一頁) ●文屋康秀　これは『古今和歌集』に、文屋康秀といふ男、參河の國司に従ひ
て下向せし時、小野小町といふ女に、ともに行かずやといひしに、答へてよみたりと
て、わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらば往なむとぞおもふといふ歌
をのせたり。●すむべき國云々　在原業平の如く、住居するに都合よき國を搜索し
にゆくにもあらずとなり。業平の故事は、『伊勢物語』に、昔男ありけり、京や住みうか
りけむ、東の方に行きて、住所もとめむとて、友とする人ひとりふたりして行きけり
とあり、これをひけるなり。

(一〇二頁) ●吳天に白髮云々　李白の詩に「白髮三千丈、緣愁如個長、不知明鏡裡、何處
得秋霜」とあり。吳天は旅の空をいふ。

(一〇三頁) ●和泉三郎　陸奥秀衡の子なり、和泉三郎忠衡といふ。父秀衡、卒するに臨

み、諸子に遺言して、源義經を援くべしといへり。歿後、源賴朝、義經を攻むるに及び、義經來り投ず、諸子、賴朝の賞を得むとして、義經を殺さむとす。和泉三郎、ひとり義を守りて、賴朝の兵と戦ひて陣歿せり。●洞庭西湖 洞庭湖は、湖南省岳州府巴陵縣にあり。西湖は、杭州府錢塘縣にあり。

(一〇四頁)●浙江 浙江省にあり。●雲居禪司 何處の人たるを知らず、高德なる名僧にて、資性恬淡、高潔にして、仙臺侯に召され、松島瑞巖寺に住めり、元和頃の人なり。(一〇五頁)●曾良 信州の人、芭蕉の門人なり。師につきて陸奥に旅す、『奥の細道』の中に、この人のことをのせて曰く、曾良は、河合氏にして、惣五郎といへり、芭蕉の下葉に軒をならべて、これが薪水の勞を助く、このたび、松島象潟の眺を共にせむことを悦び、かつは、羈旅の難をいたはらむとて旅立つ曉、頭を剃りて黒染にさまをかへ、惣五郎と改めて宗悟とす、云々とあり。●素堂 姓は山口、甲斐の人、季吟また芭蕉に學べり、江戸深川に住し、白蓮社に擬して、俳諧の社を立つ、享保二年八月十五日歿す、年七十五。●杉風 姓は鯉屋、江戸の魚商、おのが別居を芭蕉に與へて芭蕉庵とす、享保十七年六月十三日歿す、年八十六。●瑞巖寺 海岸人家の中央にあり、その初は、慈覺大師の開基にて、後、北條時頼これを修造し、松島圓福寺と號したりしが、慶長中、伊達

政宗、更に伽藍を建立し、瑞巖圓福禪寺と改稱せし巨刹なり。寺内には、政宗の木像を安置し、寶物を陳列して、衆庶の觀覽を許せり。門内右方に岩洞あり、法身窟と稱す。中興の開祖雲居和尚が座禪せし跡なりといふ。

(一〇六頁)●穢多 エタと讀む。エトリ(餌取)の略轉、中古以後、平民の下級にありて、獸を屠り、皮を剥ぐなどの如き不潔なる業を營み、諸國に一部落をなしてありし賤民の稱。明治に至りて、ひとしく平民とせられたり。

(一〇七頁)●早少女や 田植女の、知らず知らず泣く子の方に苗を植ゑて行く女子の情をいへるなり。●別れても闇に云々 これは離縁せられし女が、小供を残しおきたるを、その子を見むとおもへど叶はねば、せめては、その子の幟なりと見むとて、五月節句の夜闇にまぎれて出で行きけるさまをいへるなり。

(一〇八頁)●田をみめぐりの神 三圍社は、東京向島にあり、今なほ社内に、其角のこの句を刻したる碑立てり。こは、其角が神に奉りて、旱天に雨を得し有名の句なり。●賴政が拾ひ残しの椎 源三位賴政の歌に、のぼるべき道しなければ木の下にしひを拾ひて世を渡るなりと、蓋し、しひ(椎)にしひ(四位)をかけたたり、清盛、この歌に感じて、賴政を三位にせる話あれば、ここにも、その椎もがなといひて、昇位を望みしなり。

(一一一頁) ●向井去來 名は兼時、平次郎と稱す、肥前長崎の人、父玄勝、禁裡の醫官となり、兄某、その後をつぎて法印に叙せらる。去來、兄に従うて入り、飛鳥井家に仕ふ。後蕉門に入り、服部嵐雪等と比するに至る。寶永元年歿す、享年五十四。その著に『猿蓑集』『去來抄』あり。●森川許六 名は百仲、字は羽官、通稱五助、みづから稱して菊阿彌といへり。江州彦根の人、聰敏にて、文藝に達し、また畫に巧みなりき。許六、六藝に通ず、よりて芭蕉これに許六の名を與へたり。正徳五年歿す、年六十。●各務支考カミツコ 美濃の人、東に遊びて東華坊と稱し、西に遊びて西華坊と稱せり。また出でて野にある時は、盤子といひ、入りて家にある時は、獅子老人といへり。蕉門に入り、許六と伯仲の間にある。支考、一生の事業は著述にて、その後世を益すること少なからず。晩年故園に歸隱し、俳諧をその徒に授け、遂に美濃の一派を起すに至れり。享保十六年歿す、年六十七。『本朝文鑑』『俳諧古今抄』等十餘種の著あり。●谷口蕪村 七の卷(一〇一頁)にあり。●越智チ越人 佐分利平次郎と稱して、肥後熊本藩士なり。故ありて致仕し、尾張名古屋に住せり。蕉門の老手にて、その即吟に長せることは、蕉翁も感賞せられたりといふ。老後、その郷里に歸り、元祿十五年歿せり。●横井也有 本書作者略傳にあり。

(一一二頁) ●加賀千代 七の卷(一〇一頁)にあり。●千なりも云々 この句は、永平寺

の長老千代の庵を訪ひて、一念三千の意をよまむことを請ひしに、直ちにこの句をもてせりといふ。一説に、豊公の千なり瓢をよみしものにて、豊公の如く絶世の立身するも、みな心一つにありとの教訓俳句なりともいふ。●秋色 江戸照降町の菓子商某の妻、俗稱阿秋といへり。性伶俐にて、年十三の時東臺に至り、清水觀音堂の巽位にある井の端の大木の糸櫻を見て、かの有名なる井の端の櫻あふなし酒の酔の句を詠じたりしより、この櫻を秋色櫻と呼びなせり。●園女 伊勢松坂の人、岡西惟中に嫁し、浪華に住せり。性風流を好み、和歌をよくし、また俳諧に巧なり。よく貞操を守り、集會の席も、かつて男子と並び坐することなく、夫死して後、江戸に來り、尋いで京都に遊び、また近江に移住せり。享保十一年歿す、年七十四。

(一一三頁) ●人目も草も枯れ 山里は秋こそ殊にわびしけれ人目も草も枯れぬとおもへば『古今集』忠岑の歌なり。●三日見ぬ間 世の中は三日見ぬまのさくらかなといふ發句のあるによりて書けるなり。

(一一五頁) ●夜は月下の門を叩き 賈島の詩に、鳥宿池邊樹、僧敲月下門とあるによる。推敲の故事なり。

(一二二頁) ●ワシントン 正しくは、Washington とよむべし。千七百三十

二年米國に生る。一千七百六十五年より七十年にかけて、英國の兵と戦ひ、米國を獨立せしめ、つひに大統領の祖となりぬ。千七百九十九年十一月十四日歿す。●ナポレオン Napoleon には、一世二世三世あり、普通にナポレオンといふは、第一世のことなり。一千七百六十九年生る、百戰百勝、向ふ所敵なく、歐洲を併呑し、その餘力、亞非利加亞細亞にも及べり、佛國の帝王として威權比ぶべきものなかりき。晩年、ウオーターローの戦に敗れて、遂に大西洋中のセントヘレナ島に配流せられ、一千八百二十一年五月五日、この絶海の孤島にて卒せり。

九の卷 解釋

(一頁) ●不識廬山眞面目 宋朝廬山老人の詩に、横看成嶺側成峰、遠近看山了不同、不識廬山眞面目、祇緣身在此山中とあり。

(三頁) ●巾幗キンカクの人 巾も幗も婦人のかぶりものなり。よりて巾幗は婦女一般の稱となれり。

(八頁) ●青丹よし 平城ナラの枕詞、青き土の産あるによれり。●伽藍 梵語、精舎と譯す、寺のことなり。

(九頁) ●星月夜 星の明きこと月夜の如しといふ義、また流星の多き夜のことをいふ。鎌倉に星月夜井といふあり、井深くて常に星の影をやどすといはる。よりて鎌倉の枕詞のごとくなれり。●塞翁の馬 淮南子に、塞上之人、有善術者、無故亡而入胡、人皆弔之、其父曰、此何遽不爲福乎、居數月、其馬將胡駿馬而歸、人皆賀之、其父曰、此何遽不爲禍乎、家富良馬、其子好騎、墮而折其髀、人皆弔之、其父曰、此何遽不爲福乎、居一年、胡人大入塞、丁壯者引弦而戰、近塞人死者十九、此獨以跛之故、父子相保、故福之爲禍、禍之爲福、化不可極、深不可測也と見ゆ。●邯鄲の枕 盧生が邯鄲市上にて一生の經歷を夢

みたる故事に出づ、『枕中記』に、道士呂翁得神仙術、道中遇少年盧生、授之、生枕而夢、一生榮辱、欠伸而寤、黃粱尙未熟也。蘇軾詩に一杯歸誦之、万事邯鄲枕とあり。●祇園精舎 天竺の寺の名なり、もと祇園苑とて、方四十里の苑ありしが、須達長者ここに多くの屋宇を建てて、僧の修業する所としたるなりといふ。精舎は、精練行者の居處といふ意。●沙羅雙樹 沙羅は梵語なり、高遠と譯す。この株大木にて、遠方よりよく見ゆるが故とぞ。雙樹は、この林中に殊に大木八本ありて、しかも二本づつ四方に雙生せり。よりて雙林とも雙樹ともいふ。この花の色、春は遠方より見えて壯觀なりしに、如來この樹の下にて涅槃に入りしより、八本の大木一本づつ枯れて、斑になりきといふ。故に盛者必衰の理にたとへたるなり。●咸陽 『史記』に、秦每破諸侯、寫其宮室、作之咸陽北坂上、以東至涇渭、殿屋復道、周閣相屬、所得諸侯、美人鐘鼓、以充實之。後項羽屠咸陽、焚其宮室、三月火不滅とあり。●旁午 一縱一横なり、なほ交横といふが如し。『漢書』霍光傳に使者旁午とあり。●倥傯 事の迫促なり、また困苦なり。『楚辭』に、愁倥傯於山陸とあり。

(一〇頁) ●華山桃林 これ『書經』武成篇に、王來自商、至于豐、乃偃武、修文、歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服、とあるに本づく。●文恬武嬉 恬は安なり、嬉は喜なり。

り文武の官人安恬嬉遊して禍の生ずるを知らざる意、韓愈の平淮西碑に「相臣將臣、文恬武嬉」とあり。●虱を捫る力 王奔が虱を捫つて天下の政を談ずといふ故事におもひよせて書けるなり。

(二三頁) ●歴山王 アレキサンダー 二十歳の時、父王フィリップの後を襲ひて、マセドニア王位に即く、天資英邁にて、四方を征服し、勢破竹の如く、向ふ所前なし、ペルシャを征し、遂に印度を犯せり。然るに、從兵漸く遠征に倦み、郷國を思ふの色あり、乃ち兵を還して、ペルシヤに到り、日夜逸樂を極め、紀元前三百二十三年、病にかかりて歿す。年僅に三十三。●鳩毒 鳩は鳥の名、その羽に毒あり、これを酒に漬して飲むときは、立どころに死す。『左傳』に、使鍼季酖之、又宴安煩毒、不可懷也とあり。

(一四頁) ●ユキサンチーブス これはピロス王の誤なり。ピロス Pyrrhos は、希臘のエピレの王にて、勇氣衆に超え、紀元前二百八十年、羅馬の軍と戦ひしが、戦象および密聚長鎗隊と合して羅馬兵を苦しめぬ。されど、二百七十五年、ベネヴェンタムの一戦に、大いに羅馬兵に破られて、エピレに歸りぬ。さて、ユキサンチーブスと誤りしは、この後、羅馬とカルセージとの第一回の衝突、即ちピュニク第一回戦争の際、グリーキの勇士クサンチポス Xanthippos と、混同せられたるなり、再版の際改むべし。●ハンニバル

カルセドジの名將にて、アルプスの峻嶺を越え、羅馬に侵入し、向ふ所前なく、羅馬府殆ど累卵の危に迫れり。然るに、援軍なく、かつ、羅馬は、名將シピオ本國を襲ひしかば、已むを得ず、軍をかへせり、ハンニバル、シピオと戦ひて敗れ、その後、諸邦と連合して、羅馬の勢力を挫かむと計りしかど、事の成らざる中に、羅馬の追撃急なりしかば、自刎して死せり。●サラセン人 回教徒の一團にて、左手にそが教典なるコーランを握り、右手に劍を取り、四方を征服することを任とせり。

(一八頁)金閣寺銀閣寺 金閣寺は、昔、西園寺公繼の山莊なりしが、後、足利義滿これを請うて金閣を造築し、後にこれを寺となしたるものにて、鹿苑寺と號せり。閣畔に池あり、池中奇石多し。銀閣寺は、足利義政の閑居の地なりき。相阿彌の經營になれる庭園ありて、幽邃閑雅なり。●尾大掉はず 獸尾大なれば、掉かすこと能はざる義にて、本弱く未強ければ、制御すること能はざるに喩ふ。『左傳』に、末大必折、尾大不掉とあり。●天公云々の詩 落魄江湖此結愁、孤舟一夜思悠悠、天公亦慰吾生否、月白蘆花淺水秋。本書結句の日月とあるは、月白の誤なり。

(一九頁)言問ひし鳥の讖 『伊勢物語』に、名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやとといふ歌あり。今、東京隅田川に言問コトヒの名所あり、都鳥といふも

の、なほ川水に浮ぶ、ここに讖をなしてといへるは、後に江戸が都となれる事にいひかけたるなり。

(二〇頁)おぞや 鈍きかなの義 ●陸梁 亂れ走る貌、正義に、嶺南之人多處山陸、其強梁故曰陸梁とあり。

(二二頁)九重 九重の門の中の意にて、禁裡の一稱なり。九天に擬して、天子九門といふよりしていふ。ここにては、平家の福原の都をさせり。●豊の明 豊は稱辭なり、あかりは御酒にて、顔の照り赤らむ義、泛く朝廷の御宴會の稱。●竹の臺 雀をとまらする臺なり。●上 陛下のこと、ここにては、高倉天皇をさす。●中宮 清盛の女平徳子。●御引直し 主上、上皇の尋常に召し給ふものなり。『禁秘抄』に、引直衣有帶、昔只引給歟、近代用帶、普通直衣少短程著也、直衣、冬小葵櫻、夏單文、如臣下、冬小葵白二衣、有帶、紅打衣、張袴とあり。もとは、御下直衣といひしを、近代御引直衣といへるよし。『裝束拾要抄』に見えたり。●宮 おなじく徳子をさす。

(二二頁)朝觀の行幸 朝觀とは、もと諸侯の天子に見ゆることなれども、朝觀の行幸といふは、主上、年の初め(正月二日)に、上皇、國母等の宮に行幸あること、東宮も、御成人の時には、この儀あり。(或は年の始めならぬにも申す)。

(二三頁)●宮の御母なる八條の二位 徳子の御母即ち西八條なる平清盛の妻二位殿をさす。●紫のにはひ 『女官飾抄』に、上紫に薄紫をかさぬとあり。●山吹の御うはぎ 山吹色は、『桃花葉葉』に、表薄朽葉、裏黃とあり。●かば櫻 『桃花葉葉』逍遙院裝束抄に表蘇芳裏赤花とあり。また表薄蘇芳に、裏濃蘇芳とも、表紫に裏青などいへる諸説あり。●唐衣 女官正装の時、表衣の上に著るものにて、またきはめて短し、袖も狭き衣なり。『枕草子』に、から衣は短き衣とこそはいはめ。されど、それはもろこしの人のきるものなればとありて、もと唐服を模したるものなれば、しかいふなるべし。●小桂^{ウヰキ} 『裝束要領抄』に、これは唐衣のかはりに上に著るものなり。唐衣裳などを著たるは、男子の束帶の如し、唐衣裳などを略して、小桂著たるは、衣冠の如し、とあるにて、上臈の女の褻の服なることを知るべし。

(二四頁)●除目^{ヂモク} 任官の儀なり、春に行はるるを縣召除目といひ、秋に行はるるを司召除目といふ。縣召は、地方官を任ずる儀なり。この二季の外に行はるるを臨時除目とも、小除目ともいふ。初夜中夜入眼として、三夜にわたる儀式なり。その儀『江家次第』に詳なり。

(二六頁)●内をも院をも 内は後土御門天皇、院は後花園上皇なり。●今出川の大納

言 權大納言足利義親。●大臣 左大臣足利義政將軍のこと。

(二七頁)●都ぞ春の錦 『古今集』素性法師の歌に、見渡せば柳さくらをこきませて都ぞ春の錦なりける。とあるによる。

(二八頁)●關白 當時の關白は藤原政基、太政大臣は藤原持通なり。一條殿の父大臣とは、これの事なり。●上ぶし 禁中に宿直し居るをいふ。

(二九頁)●内侍 女官なり、唐の内侍省の名をとりたるものなり。温明殿中神鏡のある所に仕ふ、よりにてこれを内侍所といふ。●ふりはへたる事 殊更の事、わざわざの事といふ義。

(三〇頁)●烽火三月に連り 烽は烟火、寇あるとき、これをあぐ、杜甫の詩に、烽火連三月、家書抵萬金とあり。

(三四頁)●義太夫 俗謡の一種にて、竹本義太夫これを創む。大薩摩節より分る、今かたりものの本として、淨瑠璃の名を專にす。●淨瑠璃 小野のお通の淨瑠璃光如來姫十二段草子によりて、その名を得たり。前に説けり。

(三九頁)●筆築の小調子 小調子は、筆築の曲中、最も秘曲なりといふ。

(四〇頁)●潯陽江 白樂天の作、その全篇左の如し、潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟々

主人下馬客在船、舉酒欲飲無管絃、醉不成歡慘將別、別時茫茫江浸月、忽聞水上琵琶聲、主人忘歸客不發、尋聲暗問彈者誰、琵琶聲停欲語遲、移舟相近邀相見、添酒回燈重開宴、千呼萬喚始出來、猶抱琵琶半遮面、轉軸撥絃三兩聲、未成曲調先有情、絃々掩抑聲々思、似訴平生不得志、低眉信手續々彈、說盡心中無限事、輕攏慢撚抹復挑、初爲霓裳後六么、大絃嘈々如急雨、小絃切々如私語、嘈々切々錯雜彈、大珠小珠落玉盤、間關鶯語花底滑、幽咽泉流水下灘、水泉冷澁絃凝絕、凝絕不通聲暫歇、別有幽愁闇恨生、此時無聲又有聲、銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴、曲終收撥當心畫、四絃一聲如裂帛、東船西舫悄無言、唯見江心秋月白、沈吟放撥插絃中、整頓衣裳起斂容、自言本是京城女、家在蝦蟆陵下住、十三學得琵琶成、名屬教坊第一部、曲罷長教善才服、粧成每被秋娘妒、五陵少年爭纏頭、一曲紅綃不知數、鈿頭銀篦擊節碎、血色羅裙翻酒污、今年歡笑復明年、秋月春風等閑度、弟走從軍阿姨死、暮去朝來顏色改、門前冷落鞍馬稀、老大嫁作商人婦、商人重利輕別離、前月浮梁買茶去、去來江口守空船、送船明月江水寒、夜深忽夢少年事、夢啼妝淚紅闌干、我聞琵琶已嘆息、又聞此語重唧々、同是天涯淪落人、相逢何必曾相識、我從去年辭帝京、謫居臥病潯陽城、潯陽地僻無音樂、終歲不聞絲竹聲、住近湓江地低濕、黃蘆苦竹遶宅生、其間旦暮聞何物、杜鵑啼血猿哀鳴、春江花朝秋月夜、往々取酒還獨傾、豈無山歌與村笛、

嘔啞嘲哳難爲聽、今夜聞君琵琶語、如聽仙樂耳暫明、莫辭更坐彈一曲、爲君翻作琵琶行、感我此言良久立、却坐促絃々轉急、凄々不似向前聲、滿座重聞皆掩淚、座中淚下誰最多、江州司馬青衫濕、●かたさりのぬ 片去の義、舟に冠せむとしたる心も去り失せぬといふ意なり。

(四一頁) ●心あてに見し 大抵この邊ならむと想像して見し山頂は、遙か天空に聳えたれば、思はぬ空とつづけしなり。富士山の想像以外に高き事をいひ盡せり。●足乳根の心の闇 『後撰集』兼輔の歌に、人の親の心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかなとある歌などをおもひよせてよみたるならむ。足乳根の心の闇云々の歌は、『續古今集』に出でて、前大納言基良の作とあり。●加藤枝直 姓は橘氏、通稱は又兵衛、芳宜園と號す。江戸の人、大岡忠相の與力たり。賀茂真淵と交り深く、晩年に至りて、芳名海内に鳴り、弟子頗る多し。天明五年八月歿す、年九十四。

(四二頁) ●齋宮女御 重明親王の女、徽子内親王、また承香殿女御といふ。承平六年生れ、寛和元年歿す、年四十九、和歌に長じ、代々の歌集にのせらる。また集一卷あり、類從本に收む。

(四四頁) ●佐野源左衛門 本書十卷鉢の木の文を見よ。●天河屋義平 本名は天野

屋利平、大石良雄のために刀劍を製して、復仇の志を遂げしめし商人。

(四六頁) ●孔明 諸葛亮字は孔明、もと草莽に潜み、蜀の劉備に知られて世に出で、國家の經綸に従事して愆らず、また、連年兵に將として、つぶさに艱苦を嘗め、一心ただ誠忠、武功あり。五丈原にて魏の司馬仲達と對陣し、病んで陣中に卒す、年五十四。忠武侯と諡す。

(四七頁) ●腹卷 背後にて合するわり具足なり。肩と腰とに引き合せの緒あり、腹卷には、袖なきものなり、袖をつくる時は、鎧の袖を取りて付くるものなり。●胸板 『武用辨略』に、胸板は前胸の上なり、故に、金具を胸金物といふ。第一の板を弦走とも、一の寄連ともいふ。切の字を用ひすとぞ。第二を千旦、栴檀ともかくの板とも、二の寄連ともいふ。これは匂ニホヒの糸をつかふゆゑにいふとぞ。すべて胸金物のつぎより、三板を豎タテ上といふ。●蛭卷 長刀の柄を、藤にて間をすかして巻きたるをいふ。また、斜にまくもあり、或は銀の輪なるをいふとぞ。●緋絨の鎧 緋絨は、緋色に染めたる革にてをどすなり、緋は紅花にて染むるなり、その色火のもえいづる如くなるゆゑ、火絨ともなづくるなり。緋絨は、革絨がもとなれば、糸の緋絨をば、糸の字を加へて、糸緋絨といふ。また紅絨といふも、緋絨の事なるべし。『武用辨略』には、或書に緋絨と火絨とは別

なり、火絨は火魚ヒナに準へて地を朱にぬり、小札の頭を銀のみがきにして、紅の毛を以て綴るなり。故に、火魚絨ヒナとも書く云々。火魚は、今いふ金魚なり、また朱魚ともいふ。●新院 崇徳院 ●經宗惟方 經宗は阿波へ、惟方は長門へ流されしが、後に許されて京に歸れり。

(四八頁) ●北面 仙院を警衛する兵士をいふ。北面に上下ありて五位なるを、上北面、下藩の六位なるを、下北面といふ。

(四九頁) ●主馬判官 シメノハングワンとよむ。●きせなが 大將の鎧をいふ、著長と書く。鎧、腹卷の類をすべていふ時にも用ふ。

(五〇頁) ●禪門 清盛のこと、入道して淨海といふ。●西八條 清盛の住宅。●烏帽子直衣云々 大臣の烏帽子直衣をつくるは常なれども、ここは清盛以下、皆武装したる處なれば、異様に見えきとなり。『考證』に、指貫は即ち奴袴なり、膝をもて袴下に指貫する義なり。大紋の指貫は、年少の人、夏月にこれを著る云々。按ずるに、この歳、小松内府年四十、當にこれを著るべからず。疑らくは、この書の誤ならむといへり。指貫は、『貞丈雜記』に、狩衣の時著る袴は、さしぬきといふ袴なり。色は淺黄なり、腰に上ざしあり。すそにくくり緒あり、くくり袴なり、地は、平絹無文なり。公家には織物を用ひ、武家に

はもんがらなきを用ひ、くくり緒は白き組緒なり、また指貫の袴を狩袴といふ。狩衣の下に著るゆゑなり。

〔五一頁〕●世をへうする　へうは、代表する義なるべし、『盛衰記』に世を表するに作れり。こゝは、清盛はじめ一門の人々皆軍装してうち出でむとする所なるに、重盛の舉動は、例の如くおちつきて、烏帽子直垂に指貫を著して、しつしつと進みたるを、清盛が評したる語なり。●五戒　一には不殺戒、二には不偷盜戒、三には不邪淫戒、四には不妄語戒、五には不飲酒戒これなり。●鹿絹の衣　『貞丈雜記』には、くいにしへ絹に四品あり、長絹、平絹、兪絹、細絹なり。この事、惠命院僧正宣守（足利時代の人）のかかれし『海人藻芥』といふ書にあり。装束の長絹は、右の長絹といふ絹にて作り始めし故に、名づけたるなりといへり。これによれば、鹿絹は、ただ絹の織方の一種の名なり、衣は『貞丈雜記』に、装束の下に著るものなり、惣體の仕立小袖の如し。袖をば廣袖に縫ひたるなり。兩脇をば袖下より以下縫ひふさがす、色はさまざまなり、直衣ナホソの下より衣のつまの出づるやうに長くするなり、云々とあり。

〔五二頁〕●邊地粟散　『天台觀世音經』の疏に、非四輪王者名粟散土とあり。四輪王とは、金輪王、銀輪王、銅輪王、鐵輪王をいふ。また、百濟國の日羅の語に、わが國を東方粟散國

といへることあり。

〔五三頁〕●四恩　こゝには、天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩とあれど、『本生心地觀音經』には、父母の恩、國王の恩、衆生恩、三寶恩と見え、『釋氏要覽』には、國王恩、父母恩、師友恩、檀越恩と見えたり。こゝにある天地の恩は、『本生心地觀音經』に見えたる三寶の恩の事なり。三寶とは、佛法、僧をいふ。また檀越とは、施者と譯し、出家の人は、飲食、衣服等すべて施者の供給によりて身を安んじ、道を辨ずることを得、これを檀越の恩といふ。●潁川の水に云々　許由の事なり、許由は堯の帝位を譲らむといふを聞きて、その耳穢れたりとして、潁川に耳を洗ひきといふ。●首陽山に云々　伯夷、叔齊をいふ。周の武王、殷の紂王を討ちしかば、主を滅ぼす、無道の世なりとして、山に入り、蕨を食せしに、人ありて蕨もまた武王の地に生せるものなりといひしかば、遂に食せずして死にきといふ。●蓮府槐門　大臣をいふ。『南史』曰、王儉用庾景之爲衛將軍、長史蕭緬與儉書曰、盛府元僚、每難其選、庾景行泛綠水、依芙蓉、何其麗、時人以儉府爲蓮花池、南齊書曰、時人呼儉府爲芙蓉池、國史補曰、南朝相府因瑞蓮製曲、號相府蓮云々。槐門は、周禮秋官三槐三公位焉、註槐之言也、懷來人といへり。

〔五五頁〕●佛陀　『名義集』に、秦言知者とあり、『釋氏要覽』に、梵語に佛陀或は浮屠といひ、

或は部多といひ、或は母駄といひ、或は沒陀といふ、皆これ五天竺の語の楚夏なり。並に譯して覺とす。いはゆる自覺覺他覺行圓滿なり。今略して佛と稱すと見えたり。

(五六頁)●千顆万顆の玉にも云々『朗詠集』に、昔三品の文に瑩日瑩風高低千顆万顆之玉、染枝波表裏一入再入之紅とあるによりてかけるなり。顆は玉または木實などを數ふるにいふことば。一顆二顆は、一つ二つといふに同じ。珠玉は貴きものなれども、その千万の珠玉にも越え、幾度も染めたる紅は、その色殊に濃きものなれども、その濃厚なるも、朝恩にくらぶれば薄しとなり。●迷廬八万の山顛よりも云々 迷廬八万のいただきは、須彌山の頂をいふ。この山の高さ八万四千由旬ありといふ。父の恩は、これよりもなほ高しとなり。迷廬正しくは蘇迷廬といふ。『名義集』に、唐には妙高といひ、舊には須彌といひ、また須彌樓といふ、皆訛なり。四寶合成して大海の中にあり、金輪の上に據れり、日月の廻泊する所、諸天の游舎する所、七山七海環峙し環列せり、四面おのおの一色あり。東は黄金、南は琉璃、西は白銀、北は頗梨なり。その方面に隨ひて、水は山色に同じ。『毗曇俱舍』には、妙高は七寶の成る所なり、故に妙と名づく。七金山に出でたり、故に高と名づく。『觀經』の疏には、おほむね高さ三百三十六万里なり、縱横もまた然りとあり。

(五八頁)●直衣 公卿の平服にて、勅許を得し人ならでは、これを著して君前に出づることを得ざるものなり。さて、この服は、烏帽子を著るを常としたるなり。

(六二頁)●橘逸勢ヒナノの女 仁明天皇の御代に、但馬守橘逸勢といひけるは、能書の人に、三筆の一人なるが、承和の年、嵯峨上皇不豫、東宮帶刀、伴健岑、皇太子恒貞を奉じて、東國に入りて、私に廢立を謀る。逸勢これに與みせしにより、捕へられぬ。その女より、て窃に家を出でて、その宿々を尋ねつつ晝は忍びて夜々したひ行き、遠江國に入り、おひつきけるが、さて、逸勢は、遠江の板築の驛につきて、重く煩ひにけるを、この女、よる晝つきそひて看護したりき。父終に身まかりにければ、悼み哀しめることいふばかりなく、その邊に假に納めおき、みづから尼となりて、妙仲と名づけ、その墓のほとりに庵して、十とせに及びぬ。嘉祥三年に詔ありて、逸勢に正五位下を贈りのぼせられ、古郷にかへり葬ることをゆるさせ給ひしかば、父の柩を負ひて都に歸りけり。時の人々、こぞりて孝女とあがめあへりとぞ。

(六三頁)●波のぬれ衣 ぬれ衣を著るとは、讒にあひたるをいふ。ここにては、磯の波に衣のぬれて、ひるよしなきことにいひかけたり。●いをねぬ いは寝なり、寝を寝ぬは、重語となりて、意は唯寝ることなり。

(六四頁)●みをつくし 濡標(濡之申)の義遠淺の海の滂を示さむがためにその傍に建て置く杭なり、身を盡くしにいひかけたり。●高崎のやま 遠江國濱名の西境、三河八名に跨る。●およづれごと 偽り言なり。●子故の闇のそれならで云々 實忠の歌に「子を思ふ涙くらべば夜の鶴われ劣らめやねにたてずとも」また康富の歌に「明らけき月の夜にしも子を思ふ心のやみの鶴はなくなり」とあり。

(六六頁)●すみぞめのころも 墨染の衣即ち喪服と、下文頃も葉月といひかけたり。
(六七頁)●肩のまよひ 『万葉』卷七に「肩乃間亂者」とあり、肩衣の壞れたることをいふ。まよひは、下文迷の雲霧とかけたり。

(六八頁)●大雅堂 名は無名、字は貸生、通稱は秋平霞樵竹居、三岳等の號あり、京都の人、有名なる畫家にて、祇園南海に學び、法を柳澤里恭、土佐光芳などに問ふ、わが國南宋畫の開祖、また書と和歌とを善くす、種々の奇行多し、安永五年四月歿す、年五十四。●ふくつけ 食るさまをいふ。

(六九頁)●そこは そこもといふ二人稱。●かたはらいたし 側に居るも居苦しき意、片腹痛しと解するは俗説なり。

(七一頁)●百合女 京都祇園林の茶店阿梶の養女なり、客に茶を供するかたはら、筆

すさみをなし、和歌に妙なりき、貞操の譽高く、才藻をもて公卿の間に聞え、中にも冷泉黃門の眷遇を受けたりきといふ。●柳里恭・字は公美、大和國郡山藩の老臣、人となり、磊落不羈、文武の兩道を兼ぬ、醫藥、音樂、和歌、書畫、彫刻を始め、凡百の技藝に通ず、殊に畫をよくし、常に客を好み、訪ふものあれば門を閉ぢて歸らしめずといふ、寶永八年歿す、年五十三。

(七三頁)●儻石の儲 石は一石、儻は二石なり、人のこれを擔ふをいふ、儲蓄の少なきことをいへるなり。

(七五頁)●雙林寺 西行法師この寺に住居し、ここに寂せり、その居所たりし西行菴は、その遺跡を留むるのみ、四時來客絶ゆることなく、景致また頗る閑雅なり。

(七六頁)●ひたたけ 茫々としたる所をいふ、その語源は直長ならむ。●心ゆく 今日の語にて愉快といふ義に當る。

(七七頁)●いづこをはかともなく 何處とも定めずの義。●めちの限 目路の限、見渡す限なり。●花ものいはまほしげなり 李白の詩に「荷花嬌欲語、愁殺蕩舟人」とあるによりていへるなり。

(七八頁)●水無月 水之月の義にて、早苗月に對し、田毎に水を湛ふるよりいふかと

いふ、陰曆六月の一稱なり。または夏月水無き月とも解す。●てりはたたく はたたくは物の干て乾く音なり。●ものへなむまかりぬる 外出せることをいふ。

(七九頁)●伊豫簾 伊豫浮穴郡父之川村より産出する簾、露の峯の山中の篠極めて細く、六七尺も延ぶ、その莖にて編むといふ。かくて、伊豫産ならずとも、上等の簾をイヨスといふ。●簀子 簀子の縁をいふ、板敷となれるをいふ。●ものから ものながらの義、口語ものであるからと混すべからず。●さうざうし 淋淋しの音便にて、寂寥なるをいふ。●まとる 圓坐にて、衆人輪の如く居並ぶこと、車座のことなり。今の語にて會すること。

(八〇頁)●にてをありなむ にてあれかしと願ふ義、をば、強辭の助詞なり、漏ぬれてを行かむのをの如し。●前栽 庭前に栽えたる草木、後園に對していふ。●たてるに火いしたる たてる燈籠に火いれたるにといふこと、燈籠の二字を省けるなり。

(八一頁)●したり顔 爲たり顔の義ならむ、しすましたりと誇る顔色をいふ。●妻戸『言海』に(端戸か隅戸か)とあり、舞戸にて、兩方へ開くもの。●ふる川のべの云々『新古今』有家の歌に、涼しさは秋やかへりてはつせ川ふる川のべの杉の下かけ

(八四頁)●丸鬘 婦人の髪、風頂に大きく楕扁なる鬘を作る、嫁したる女の結ぶもの

とす。●島田鬘 駿州島田驛の遊妓の髪風より起るといふ。東京にては、多く未だ嫁がざる處女の結ぶものなり。●水櫛 櫛の齒の粗きものにて、水に浸して梳く。

(八六頁)●三途八難 三途は、佛説に、地獄道、畜生道、餓鬼道、三惡道、火途、血途、刀途、これなり。八難は、飢渴寒暑、水火刀兵の八大災難をいふ。

(八七頁)●紅塵万丈 塵氣目に映じて紅色を成すをいへり。されど、王禪の詩に、停車傍明月、走馬入紅塵といふ句あれば、穴勝日に映じたる塵を紅塵といふべからず。恐らくは熱鬧の義にとりて紅といひしならむ。李陸の詩に、紅塵塞天地、白日何冥々、とあり。●松橋 肥後國宇土郡にある港なり。

(九一頁)●秋の風のことば 秋風起兮白雲飛といふ例の有名なる漢武帝の秋風辭、古文眞寶後集の初にある詩句なり。●かげろふ かげろひの轉、春の長閑なる日に、空中にちらちらと立ち上りて見ゆるもの。●笠にぬてふ 鶯の笠に縫うてふ梅の花折りてかざさむ老いやかくる」と古今集の歌あり。

(九二頁)●またるるものは鶯の聲とあり。●今一聲の『拾遺集』公忠の歌に、行きやらで山路くらしつ時鳥、今一聲のさかまほしさにとあり。●常世の國 (底依國の轉にて、絶

遠なる意といふ遙に離れて容易に往來し難き國土の泛稱。御毛沼命者、跳波穩渡坐
于常世國。命田道間守遣常世國令求非時香菓。また心からとこよを捨てて鳴く雁の
などあり。

(九三頁) ●みるめ 「海松」と書く、海草の名なり。海松の布といふ義なり。伊勢の海人の
朝な夕なにかづくてふみるめに人を飽く由もがな。など歌には多く見る目にいひ
かけたり。●雲のはたて 雲の果なり。●おほどか 寛に靜かなるさまをいふ。●花
を見捨つるなど 『古今集』伊勢の歌に、春霞たつを見すてて行く雁は花なき里に住
みやならへるとあり。

(九四頁) ●延喜天曆の帝云々 延喜は、醍醐天皇の年號、天曆は、村上天皇の年號なり。
この兩帝は、いづれも聖帝と稱し奉らるるなり。されど、今の高倉院には勝らせ給ふ
こといがでかあらむと、諸人申したりとの意。

(九五頁) ●北の陣 『拾芥抄』に縫殿陣朔平門、云北陣云々とあり。朔平門は、内裡の北門
なればなり。●野分はしたなく云々 野分は、秋の末頃に吹く暴風をいふ。はしたな
くは、無情の意なり。野分の風は、つれなくも吹きあれて、御愛觀の紅葉は、皆散り落ち
て見すばらしく、亂雜になりたりとなり。●殿守の伴の造云々 禁庭の御掃除する

主殿寮の下司は、朝掃除をすとして吹き散らされたる紅葉を、悉皆掃き捨てたりとな
り。こゝは、源公忠卿の歌、とのもりのとももの造心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな
とあるをとりて文をあやなせるりな。●縫殿陣 縫殿寮にある壺をいふ。縫殿寮は、
内裏の北内藏寮の東にあり、女官の考課を司り、御服の裁縫等を監督する官舎なり。
●奉行の藏人 上命を奉じて行ふ。いはゆるその係りの藏人なり。

(九六頁) ●林間煖酒云々の詩 この詩は、白居易の山遊寺に遊びて詠じたるもの
に、白氏文集にあり。

(九七頁) ●あさましかりつる夏云々 物さはがしき夏の時節もはや過ぎて、秋にも
なりたりしの意。こゝは遷都などのために、人心も動搖し、世の中不穩なりしをいへる
なるべし。●源氏の大将の昔の跡 『源氏物語』に、源氏の君、都を住みわびて、須磨より
明石にかけて行かせたまひし事あり。則ちその跡を襲ひて、須磨明石の名所の月見
にて、諸公卿の行きたるなりとおもしろくかきなせるなり。●須磨 攝津の武庫郡
にある名所なり。●明石 播州の名所。●繪島 一の谷の西南五海里にあり。

(九八頁) ●白浦 しじら濱ともいふ、攝津にあり。●吹上和歌の浦 いづれも紀伊に
あり。●住吉難波 いづれも攝津にあり。●高砂尾上 いづれも播州の名所。●伏見

廣澤 伏見は、紀伊郡に屬し、今の伏見町なり。廣澤は、葛野郡にあり、今の嵯峨村の東にあり。いづれも名所なり。●徳大寺實定 右大臣公能の子にて、保元より文治の間の六朝に歷仕し、官左大臣に至れり。性穎敏にて和歌を好み、西行法師と無二の友なりき。晩年薙髮して如圓と改め、一堂を寢殿の一角に設け、常に歌人をひきて、みづから娛めり。

(九九頁)●源氏の宇治の卷 『源氏物語』の宇治十帖中に、この優婆塞の宮の事あるをもて、宇治の卷とここにかけるなるべし。●優婆塞の宮 優婆塞の宮は、桐壺の帝の第八の御子、冷泉院の御弟なり、八宮と申す。源氏橋姫の卷に、宇治に住ませたまへること見えたり。優婆塞は、梵語なり、善男と譯す。俗人にて佛門に歸したる男をいふ。八宮は、まだ出家せさせたまはざれども、深く佛門に歸依せられたるによりて、かくは申せるなり。この優婆塞の宮の御女に、大姫君、中の君、三の君の三人在し給ふ。ここは、大姫君を申せるなり。●待宵の小侍従 小侍従は、大僧都法印光清の子成清の女なり。『撰集抄』に、伊勢の事とせるは疑ふべし。『盛衰記』に、元は阿波の局と稱し、高倉院御在位の時、宮仕へしたるものよし見えたり。實定卿と通じけり。ある時、まつ宵の深けゆく鐘のこゑきけばあかね別れの鳥はものかはとよめる歌の秀逸なれば、やが

てその名を得しなり。

(二〇一頁)●松蟲 その聲、松吹く風の音の如くなればいふか。今のすすむしにて、その聲、リンリンと聞ゆるもの、「こほろぎ」の屬「すすむし」「まつむし」の名古今あひ反せり。●すすむし 聲を名とす。「まつむし」「こほろぎ」の屬、色黒く松蟲に似て、首小く、尻大きく、背すぼく、腹黄白なり。夜鳴く、その聲、リンリンといふが如し。●轡蟲 きりぎりすの屬、翅青く、腹黄にて、前脚長く、疾く走り跳る、秋なく、がちやがちやと聞えて、轡の鳴るが如し、籠に畜ひて聲をきく。

(百〇八頁)●御堂關白 關白兼家の子道長、人となり、豪放にて大度あり。十五歳、從五位下に叙せられ、累進して遂に從一位關白太政大臣となる。三女、宮中に入りて后となり、皇太子を生む。道長外舅をもて專横暴恣を極む。華美なる法成寺を建てし故に世人御堂關白といふ。万壽四年十二月薨す、年六十二。●四條大納言 天元年中、侍從となり、長徳長保の間、中納言に任せられ、檢非違使別當を兼ね、人となり、聰明英才博學にて、典禮に精しく、詩文和歌をよくし、傍ら音樂を巧みにす。後、大納言に進む。世に四條大納言と稱す。長久二年薨す、年七十六。

(二〇九頁)●能因入道 俗名は永愷、遠江守橘忠貞の子、兄肥後の守元愷の養子とな

る。永愷始め文章生に補せられ、肥後守となる。後、薙髮して、名を能因と改め、攝津の小曾部に隠る。世に小曾部入道と稱す。和歌に巧なり、その著『玄々集』あり。●實綱 日野三位資成の子。●三島 三島の宮は、伊豫國越智郡大三島宮浦にあり、大山祇神を祀る。今は國幣中社なり。●貞觀の帝の蝗を吞みたまひける政 貞觀の帝とは、唐の太宗をいふ。『貞觀政要』『務農篇』に、「貞觀二年、京師旱、蝗蟲大起、太宗入苑視禾、見蝗蟲掇數枚而呪曰、人以穀爲命、而汝食之、是害于百姓、百姓有過、在予一人、爾其有靈、但當蝕我心、無害百姓、將吞之、左右遽諫曰、恐成疾、不可、太宗曰、所冀移災朕躬、何疾之避、遂吞之、自是不復爲災」とあり。また白氏文集(三)諷諭新樂府に、捕蝗刺長史也」として出でたる七言古詩中に、貞觀之初道欲昌、文皇仰天吞一蝗、一人有慶兆民賴、是歲雖蝗不爲害とも見えたり。

(一一〇頁) ●和泉式部 八の巻に出でたり。●小式部内侍 和泉式部の女にて、父は和泉守橘道貞、上東門院に仕ふ。幼より歌の譽ありけるは、大江山の歌などにてしるべし。

(一一二頁) ●江舉周 丹波守大江匡衡の子にて、官和泉守に至る。●赤染衛門 大隅守赤染時用の女、有名なる歌人にて、紫式部と名聲を等しくす。

(一一三頁) ●匡房卿 大江匡房は、幼より經史に通じ、また詩を巧みにし、神童の聞えあり。長じて、博識強記、制度典禮に精しく、また和歌詩文に巧なり。後三條天皇の信任を得、累進して大藏卿となる。天永二年薨す、年七十一。

(一一四頁) ●花園左大臣 源有仁のこと、輔仁の子なり。康和五年生れ、久安三年薨す、年四十四。和歌に堪能にして、『金葉』以下の諸集に多く出づ、また『園記』『春翫記』等の著あり。

(一一五頁) ●友則 紀友則は、有名なる歌人にて、延喜中、醍醐天皇の勅を奉じて、貫之、躬恒等と、『古今和歌集』を撰む。寛平九年正月、土佐掾となり、延喜四年、累進して、從六位大内記となる。延喜五年歿す、年六十。三十六歌仙の一人なり。

(一一九頁) ●杵齋 圓齋方柄などいひて、齋は孔、柄は柄なり。孔の圓くして、柄の方なるは、あひ合はざるをいふ。『楚辭』に、「圓齋而方柄、今吾固知其鉏鋸而難入。」「史記』に、「持方柄欲、内圓齋、其能入乎」とあり。

(一二〇頁) ●マコーレー 一千八百十年十月生る。英國近代第一流の學者、批評家、兼歴史家なり。その母は、書肆の女にて、非常の學才ありき。マコーレーその薰陶をうけ、幼より詩を好み、古文學を修め、大學を卒業して、また法律を修め、詩人として世に知ら

れ、後議會に入り、雄辯を揮ひ、政治家として名高かりき。千八百五十九年歿せり。一代の内著はしし書籍甚だ多く、その中にて第一の傑作は『英國文明史』なり。その文章は、何れも燦爛たるものにて、今日も教科書として用ひらる。一生涯妻を娶らず、妹と中よく暮し、全く學者として世を送りたりといふ。●ホーマー Homer は、希臘古代の詩人にて、その時代生所定かならず、恐らくは紀元前一千二百年頃ならむといふ。その有名なる詩に、イリアッド Iliad 即ちトロイ戦争を叙せるもの、およびオディッセー Odyssey 即ちウルセッスの零落を叙せるものあり。●柿本人麿 孝昭天皇の皇子、天足彦國押人尊の後裔、父は、大和國の人、石見國にて生る。持統文武の兩朝に事へて、六位に叙し、新田部皇子と、高市皇子との舍人に補せらる。文武兩道を兼ね、最も和歌をよくす。山部赤人と並び稱せらる。慕所詳ならざれども、大和國添上郡樸木村柿本寺ありといふ説、信なるが如し。中御門天皇の享保八年、正一位を贈らる。●山部赤人 有名なる歌人にて、柿本人麿と名聲を等うし、その道の二聖と稱せらる。神龜天平頃の人なり。●支那三代の詩 兩漢の詩 三代の詩は『詩經』にあり、兩漢の詩は、蘇武季陵などの詩をいふ。この時代には古詩および樂府の最も見るべきものありき。

(二二一頁) ●盛唐の詩 詩家、唐の詩を分けて盛唐中唐晚唐となす。盛唐の詩とは、李

太白杜甫王維孟浩然高適岑參などの詩をいふなり。

(一二三頁) ●帥民部卿經信 權中納言源道方の子、官大納言に至る。和歌詩文に長じぬ。天下の判者と稱せらる。承徳元年歿す、年八十六。●唐の後 『續古事談』には高麗の王と書けり、則ちここに唐といふは、支那にあらず、高麗のことなり。よりて下文鶏林とひび對す。●雙魚難達鳳池之浪 來書の趣は、朝廷へ進達し難しといふ義、雙魚は、書簡のことなり。『古樂府』に客從遠方來、饋我雙鯉魚、呼童烹鯉魚、中有尺素書、長跪讀尺素、書中竟何如、云々とあるによる。鳳池とは、鳳凰池のこと、中書省のことなり。今ここに鳳池といふは、朝廷をさせるなり。雙魚に對して鳳池之浪と語をあやなせるなり。●扁鵲豈入鷄林之雲 醫師は貴國へ差し向け難しといふ義。扁鵲は、渤海の人、非常なる名醫にて、死人も蘇生せりといひ傳へらる。ここには、日本の醫をさしていへるなり。鷄林は、新羅のことをいふ。『東國通鑑』に、新羅王夜聞金城西、始林間有鷄聲、遣人視之、有金色小犢掛樹梢、白鷄鳴於下、開之、有小兒在其中、名闕智、以其出於金犢、有鷄怪、改始林名鷄林、因以爲國號とあり。●唐の梁伯鸞が妻孟光 『逸民傳』に、後漢梁鴻字伯鸞、扶風平陵人、家貧、尚節介、博覽不爲章句、勢家慕其高節、多欲女之、鴻並不娶、同縣孟氏有女、狀肥醜而黑、力舉石臼、鴻聘之、名孟光、字曰德曜、乃共隱霸陵山中、以耕織爲業、詠詩

書彈琴以自娛、後過京師、作五噫之歌、居齊魯之間、遂至吳、爲人賃舂、每歸、妻爲具食、不敢於鴻前仰舉案齊眉とあり。

(二二四頁)●齊眉の禮 夫に事ふる禮をいふ。その所以は前註の故事によりて起れるなり。●西施 美人の名『拾遺記』に西施越女所謂西子也、有絶世之美、越王勾踐獻之吳王夫差、夫差嬖之、卒至傾國と見えたり。●南威 これも美人の名、『戰國策』に晋文公得南威三日不朝、遂權南威而遠之曰、後世必有以色亡國者と見えたり。●秦中吹 これは『白氏文集』に議婚と題したる五言古詩なり、秦中吹すべて十首あり。●白樂天 唐朝の詩人にて、性温厚忠誠、當時牛李黨を結び、あひ軋轢せしかど、終にいづれにも與せざりしを見れば、その人格の高潔なる知るべし。後、江州の司馬に左遷せらる、謫居安然たり。その詩温藉、古來わが邦人に愛讀せらる。●遙見人家云々 この原詩は、貌隨年老欲何如、興遇春牽尙有餘、その轉結は、本書にある二句あり。

(二二五頁)●清原滋藤 皇太后宮亮清原秀貞の子、官中務丞に至る。●一文一武云々 この詩は、文を學びて、成らずまた武を學びて成らざる意をいふ。●邯鄲歩 『書言故事』に、學無成、曰、未得邯鄲歩とあり。その出典は、『莊子』に、子獨不聞夫壽陵餘子之學行於邯鄲、與未得國能、又失其故行、直匍匐而歸耳と見ゆ。●杜荀鶴 『全唐詩話』に、杜荀

鶴字彥之、有詩名號九華山人、或云、杜牧之微子也、大順初、擢第、授翰林學士、爲知制誥、其文爲唐風集と見えたり。●臨江驛 杜荀鶴宿臨江驛詩と題せる詩なり、臨江驛は、江西省臨江縣にあり。

(二二六頁)●橘直幹 長門守長盛の子、初め大内記に任せられ、大學頭となる。後、文章博士となるに及びて、帶ぶる所の兩官を停められたりしが、この時、恰も民部大輔の闕けたるにより、これに兼任せられむことを希望し、三統元夏が式部少輔より、儒職に補せられたる日、なほ少輔を罷めずしてこれを兼ねしめられたる例を引いて、申文を上りしことあり。●奮然上人 奮然は、高僧なり。三論を學び、また密乘を元果に受く、永觀元年、入宋して勝地を巡禮し、明師に歷觀す。汴都の西華門外にある聖禪院に至り、優填王の造りし釋尊像の第二の模像を拜し、乃ち佛工張榮に命じてこれを模刻せしむ。太宗皇帝日本の世系國祚を問ふ、奮然奏對詳備、帝稱歎して紫方袍を賜ふ、辭して受けず、五臺に上り、文珠を禮す。雍熙三年、大藏經五千四十八卷および十六羅漢の畫像を得て歸る。長和五年寂す。その優填の模像、今嵯峨の清涼寺にあり、國人瞻禮日に絶えずといふ。

十の卷 解釋

(三頁)●御息所 御やすみ所の音便なる、御やすん所の略、皇子皇女を生みまゐらせたる女御更衣の尊稱にて、東宮親王の妃の尊稱にもいふ。●北の方 貴人の妻室をいふ。『二判問答』に、室家稱北方事自大臣至殿上人室家通稱歟とあり。●典侍 ないしのすけ、また、てんじと讀む、内侍の次官なり。●掌侍 内侍の判官、單に内侍とのみもいふ。正四人、權二人あり、その第一なるを一の内侍、または、勾當の内侍といふ。常に長橋の局と稱す。●吹上紅葉山 いづれも宮中にある御苑なり。●かつ見ながらに『古今集』ともだちの人の國へまかりけるによめる、在原滋春、別れてはほどを隔つとおもへば、やかつ見ながらに兼ねて戀しきとあるによる。

(三頁)●古の夢の胡蝶 『莊子』に曰く、莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、自喻適志與、不知周也、俄然覺則遽々然周也、不知周之夢爲胡蝶、與、胡蝶之夢爲周、與、とあるによる。

(四頁)●さうざうしさ さみさみしさの音便、寂寥たるありさまをいふ。

(五頁)●御車寄 殿舎に牛車を寄せて昇降する所をいふ。●桂袴 桂はうちきとよむ、婦人の上著なり。袴は、今の女學生の用ふるカンミール(印度の地名、ここの名産と

いふ赤き袴をいふ。

(二頁)●塗炭の苦 塗は泥、炭は火なり、塗泥炭火の中にあるが如き困苦をいふ。『書經』に有夏昏德、民墜塗炭とあり。

(二頁)●允恭天皇の枉げて皇位に登り云々 天皇、かつて足疾にかかりたまひ、父帝仁徳の曰く、汝すでに父母よりうけし肌膚を破る、大位に登るべからずと、仁徳帝の崩後、群臣争ひて即位を勧め奉りしが、先帝の言を楯とし、許したまはざりき。偶妃大中妃、御手洗の湯を進め、百僚のために即位を請ふ、天皇なほ許したまはず、時に嚴寒、妃が捧ぐる盤水凍り、妃遂に絶倒す、天皇その至誠に感じ、遂に百僚の請を容れて即位したまへり。●皇極天皇の雨を祈り云々 天皇即位の初、天下大いに旱す、百姓甚だ苦しみ、大臣蘇我蝦夷、各寺刹に命を傳へて降雨を祈らしめかど、更にその效なかりき。天皇乃ち南淵河に幸し、親ら天地四方を拜して雨を祈らせたまひしに、大雨盆を傾け、五日間、雨降り續きて、百姓皆大いに悦び、至徳天皇と稱し奉りき。

(三頁)●珍彦 ウツヒコとよむ、神武東征の際、御船を導きし土人なり。●肇國しらす天皇 ハツクニシラススメラミコトとよむ、初めて安らかに國を治めたまへる天皇といふ義なり。●天湯河板舉 アマユノカハタナとよむ、垂仁の皇子譽津別王

は、年三十に至りても嗚なり。たまたま鶴ツグヒといふ鳥の空に飛ぶを見て、始めてものいひたまひき。天皇乃ちその鳥を捕へむことを命じたまへり。板舉速イタナに勅を奉じて、出雲今の但馬をも含むにまで追ひ到りて、これを捕ふ。譽津別王この鶴を弄びて、遂に言語を得たまひき。板舉よりて姓をたまひ、鳥取造といふ。今鳥取縣の地名も、これより起れり。●泉媛 景行天皇十八年春三月、天皇筑紫に幸したまひし時、石瀬河邊に衆人の集へるを望見したまひ、かれは敵ならずやとて偵察せしめたまひしが、諸縣君泉媛が大御食オホミケを奉らむとせるなりとの復命に接したまへり。●小子部オホコソベ螺シノ 雄略帝の時の人、雷を捕へたりと稱せらるる勇士なり。性甚輕急にて、雄略帝のかひこヒを集めよと仰せられしを、速斷して飼ひ子と思ひ、多くの小供を奉りたり。

(一七頁) ●杳々ソコソコ 杳々は、くらき貌、また深廣の貌なり。靉靆は雲の盛んなる貌なり、ここには、霞の形容に用ふ。●青女 霜の神なり。『淮南子』に、青女乃出以降霜雪。註に、青女は、天神青嫫玉女霜雪を主るなりとあり。●娥 素娥と同じ、月中の美人をいふ。『事文類聚』に、張衡靈昇請不死之藥於西王母、媼娥竊之以奔月、是爲蟾蜍とあり。

(一八頁) ●李商隱 唐の詩人、字は義山、博覽強記、著作甚だ多し、その中『雜纂』は、清少納言の『枕草子』の原本と稱せられ、その詩は、『三禮詩』中に載せらる。●不識菴 上杉謙

信のこと ●霜滿軍營云々 この詩の轉結は、越山併得能州景、遮莫家郷憶遠征なり。結句の訓讀、古來より誤れり、ともあれ家郷にては遠征を憶ふらむと、と訓すべし。家郷にては、わが遠征を憶うて悲しむものあらむも、われは、今この月明に對して、愁をよすること能はず、故郷にては、ともあれ、ままよといふ義なり。

(一九頁) ●立田姫 秋を司る神、大和の平群に座す。

(二〇頁) ●霜葉紅於二月花 遠上寒山石逕斜、白雲生處有人家、停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花。こは山行と題する杜牧の作なり。

(二一頁) ●兄弟の契 こは『雨月物語』卷一菊花の契と題するものを抄録せるなり。この書の筋書をせむに、出雲國松江郷の人赤穴宗右衛門といふもの、富田の城主鹽冶掃部介の臣なりしが、一日、近江國佐々木氏綱の許へ密使として行き、その所に止まる間、本國にて、尼子經久、富田城を乗りとりて、鹽冶氏を退けしかば、赤穴、慨嘆に堪へず、歸途遂に疾にかかり、本書に引用せる如く、播磨國加古驛の人左門といふものに助けられて、義兄弟の契を結び、左門の母に實母の如くに事へぬ。されど、出雲の事心にかかりて忘れ難ければ、今年重陽の日を期して、再び歸らむ事を深く契り、やがて、出雲に行きぬ。然るに、國に歸りて見れば、國民皆舊主の恩を忘れて、尼子に従ふ事

の無念さに、從弟丹治にすすめて、竊に尼子を殺さむと謀りしが、丹治却りて赤穴を捕へて、尼子の城中に入れしむ、やがて、日月たちて、契約せし重陽の日來りぬ、赤穴義を重んずるものなれば、その約に違はじとて、みづから乃に伏し、靈魂となりて、左門の所に來れるなり。ここまでは、讀本に抄録せる文なり。それより、左門は、義兄赤穴の横死したる事を知り、その仇を報いむとて、老母に別を告げて出雲に赴き、かの丹治をば斬り殺しぬ。尼子その情を知り、その義にめでて、敢て左門が跡を追はしめざりきといふにて話は終るなり。

(二二頁) ● 瘟カ フンビウとよむ、エヤミのこと、流行性の熱病なり、またオコリともいふ。

(二三頁) ● 運は天にあり 原文には、死生命ありとありしが、文部省検定願の際、かの検定官、死生命ありは難解の語なれば、とりかへよといひたれば、かく「運は天にあり」と改めたり。文部検定を有難がる人のために一言す。この類他に多し。

(二六頁) ● 烟影の中 赤穴は、富田城にありける從弟丹治を訪ひしが、丹治は、體よくすかして、經久に會見せしめ、その心を動かさしめむとせり、されども、赤穴の赤心動かすべくもあらず、よりにて尼子經久は、赤穴をきびしく城中に留めて出でざらしむ、

赤穴、重陽の日を期して歸るべき約を思ひおこし、魂よく一日に千里を行くといへば、死して義弟義母に遇はむとて、自刃しけり。さて、その靈魂髣髴としてかけろひの中より來れるなり。

(二七頁) ● 芳流閣の奮闘 この章の筋書せむに、犬塚信乃といふもの、その亡父番作が遺訓に隨ひ、管領持氏より春王殿に讓られたる村雨の寶刀を、執權横堀史在村の邸に持參せしが、その前、左母二郎といふものに、村雨の寶刀をすりかへられたるを知らず、いよいよ登城して奉らむとするに際し、始めてこれを悟り、後悔せむ方なかりしが、城使の入來について、やむなく登城し、さて、その事情を哀訴したれども、在村更に聽き入れず、これ必ず間諜ならむとて、急に兵士を召してこれを捕へしむ。かくて、現入と奮闘するに至れる次第を記せるものなり。本文は、『八犬傳』第三輯五卷より第四輯一卷にあり。因にいふ、芳流閣は、下總の國府臺、今の近衛砲兵の居る所の川邊に建てられたるものなりといふ。『八犬傳』はもとより架空の小説なれば、『八犬傳』の古跡あるべきにあらねど、馬琴が、この文を草する時、國府臺の實況を理想にのぼして、筆とりし事は明らかなる事なるべし。● 瀧見の間 古河城中會見の座敷なり。

(二八頁) ● 臍を噛む 『左傳』莊公元年にも、し早く圖らずんば、後臍を噬まむとあり。悔

ゆとも及ばずといふ義なり。按ずるに、麝香猫と稱する獸あり、臍に芳香を備ふ、即ち麝香なり。この猫、人に捕はるるや、臍を噬て頻に芳香を掩護し、死して後止むとなり。悔ゆとも及ぶなきを、臍を噬むも及ばずとは、これに、取るなり。

(二九頁) ● 遠侍 古武家の邸にて、中門の傍にある廊の如き處にて、番の侍の居る所なり。

(三〇頁) ● 籠楯 ヲダテとよむ、小楯とも書く、假りの楯のことなり。

(三一頁) ● 蛭卷 長刀など、籐にて間を隔てて卷きたる所をいふ。● 矢庭 矢を射たるその場より轉じて、立どころにもものすること、猶豫のなきこと、急遽のことに用ひらる。● 涿鹿 支那黄帝の都、今の直隸省宣化府保安州に當る、黄帝が蚩尤といふ諸侯を討ち平げたる古戰場なり。● 朝歌 もと殷の武乙の都、今の河南省衛輝府淇縣に當る、三國の時の古戰場『演義三國史』などに見ゆ。

(三二頁) ● 葛飾の行徳 カシガハ ゴトク 下總國東葛飾郡にあり、利根川の支流、即ち本書芳流閣のあ
る川の下流に位す。

(三五頁) ● 膳臣巴提使 一本巴提使ハチヒとす、欽明天皇六年春三月、韓國の地にて軍に從ひける時、ある大雪の夜、おのが愛子を虎に捕はれたるを怒り、みづから虎穴に入り、

左手をのべて虎舌を執り、右手もてその皮を剥ぎ取りて歸れる勇士なり、『日本書紀』欽明卷に出づ。● 富田三郎 『早引人物故事』に出でたる勇士、足利時代の人。

(三七頁) ● 被籠の鎖脰當の端 ウツリカケ ノハシ キコミのくさり、コテのはづれとよむ。キコミは、著籠にて、衷甲とも書く、衣の下に籠めて著る鍵帷子ウツリカケのこと。脰當は、籠手のこと、両の腕を被ふもの。● 裏かく 裏にまでとはること。

(三九頁) ● ルイザ Louise は、一千七百七十六年生る。普王フレデリック、ウィリアム三世の后たり。皇子の教育に心を勞して、遂に獨逸を勃興せしめたる事蹟は、本書にくはし、一千八百十年崩す。● オーストリッツ 正しくはアウステルリッツ Austerlitz とよむ。オーストリア國モラビアの一邑なり。一千八百五年、奈翁が、露澳同盟の軍を破りたる地なり。

(四〇頁) ● ウィリアムピット William Pitt は、一千七百五十九年生る、幼より政治的才幹に富み、國會議員として名を挙げ、遂に宰相として常に國會を左右して、その威權比ぶべきものなかりき。英國史中、實に第一流の政治家なりき。一千八百〇六年歿す。かれの借財五萬ドルは、國民これを負擔して辨償したりといふ。終生無妻にて、しかも品行端正、意志硬固、唯飲酒の弊は免れざりきとぞ。

(四一頁) ●チルシット Elst は、プロシヤの東部にある一市。一千八百〇七年、奈翁が普露の王と會して條約を結びし地なり。

(四二頁) ●エルベ河 Elbe 河は、オーストリアと獨逸との國境を流るる河。●マグデブルグ Magdeburg は、中央プロシヤのエルベ河に沿へる都會なり。

(四三頁) ●フリードリッヒ Friedrich は獨逸語、英語にては、フレデリック Frederick といふ。ここにては、ルイザ後の祖父に當るブレテリック大王のことをいふ。大王は、一千七百二十年生れ、諸所を征服して、大いにプロシヤの基礎を固め、國民のあらゆる活動的事業を創め、大いに普國の富強を致せり、一千七百八十六年崩す。

(四四頁) ●タアリーラン Talleyrand (佛語タレーランと發音す) は、一千七百五十四年生れ、佛國有名の外交家なり、一千八百三十八年歿す。●メーリー Mary は、ヘンリー八世の女、一千五百十六年生る。英國の女王となり、舊教徒を保護して新教徒を迫害せり。晩年嗣なく、一千五百五十八年、疾んで崩す。●カアレー Calais は、海峽の義、英佛の間をドーバーカアレーといふ。而して、カアレーといふ地名は、佛國の海岸にあり、この地、初めは英領なりしが、女王メーリーの時、これを失へり。

(四五頁) ●シャルロットテンベルヒ Charlottenburg は、獨逸首府ベルリンの東北にあり。

●名工ラウヒ Rouch は、一千七百七十七年、獨逸に生れたる有名の彫刻家なり、女后ルイザの彫刻の外、ゲーテ、シルレル、フレデリック、大王等の肖像を刻しぬ、一千八百五十七年歿す。

(四六頁) ●一世帝維廉 維廉は、英語よみにてウィリアム、獨逸よみにてウィルヘルムなり、ウィルヘルム一世は、ルイザ后以來の國辱を雪ぎ、大いに佛國を伐ち、はじめて獨逸國の皇帝の位にのぼりたる帝王なり、一千七百九十七年生れ、一千八百八十八年崩す。●人の親の心は闇の歌 こは、『後撰集』兼輔朝臣の歌なり。

(四七頁) ●舐犢の愛 『成語考』に、おのが兒を愛することを謙遜して老牛舐犢といふ。(五〇頁) ●中堂に通夜し 中堂は、叡山の本堂、通夜は、夜中祈願をこめて夜をあかすことなり。●重病失除 重病の除き去るやうにと佛に祈禱すること。●西塔の北谷

黒谷 西塔は、西塔院といふ事なり。根本中堂の西北十餘町にありとぞ。その西塔院の北に當れる谷にて、黒谷といふ所をいへるなり。黒谷は、西塔より北の方二十町ばかりの處にあり。●二十五三昧 『大藏法數』に、二十五三昧二十五有を破すといふことあり。元來、三昧は、正しく禪定に入る義なれば、廿五種の三昧法によりて、廿五種の執著心を破ることなり。たとへば、無垢三昧破、地獄有、不退三昧破、畜生有心樂三昧破。

餓鬼有などいふ類なり。委しくは原書を見て知るべし。●堅者 天台宗の僧職なり。沙彌戒を歴たる人、これに補せらる。●沙彌の形 髪を剃りて、出家の有様となれるをいふ。沙彌とは、もと佛道に入り初めたるばかりのものをいふ語なり。

(五一頁) ●美濃三郎義明を討ちて 爲義十四歳の時は、鳥羽天皇の天仁二年なり。義綱を討ちたるよしは、義家の子義忠、郎従のために殺されし嫌疑にて、義綱の三男義明等追討せられしかば、義綱怒りて近江國甲賀郡甲賀山に椽籠り、謀叛したればなり。義綱は義家の弟なり。●栗子山 参考本には、栗栖山に作る。然れども、諸異本皆栗子山(又栗籠山)に作り、『百鍊抄』『歴代皇紀』『栗前山に作り』『中右記』も宇治の一坂邊とあり。さて、栗栖山は、近江なれども、栗子山は、栗前山栗駒山ともいひて、山城國久世郡にて宇治に近き地なり、大和への通路なれば、ここにて防ぎし事明かなり。●檢非違使 『宇津保物語』には、略してヒ井ともよめり。非違は、『令集解』の朱説に、非者非法也、違者違法也、とありて、非法違法を檢校糾察する役なり。常に衛門府にて兼帶したるものにて、役所は、近衛の北堀川の西にあり、これを檢非違使廳といふ。略して使廳ともいふ。●貞任宗任 いづれも、阿部頼時の子なり。●中御門中納言家成卿につきて 家成卿によりて、朝廷への執なしを願ふ事なり。●受領 國司をいふ。●武衛家衛・武

衛は、清原武則の子、家衛は、清原武貞が子なり。●基衛 陸奥の押領使清衛の子にて、陸奥出羽の押領使なり、前九年の役に、頼義に誅せられし經清の孫なり。

(五二頁) ●義房坊 爲義のことなり。●わが身合期したらばこそ、わが身が病にもかからず、思ふやうになるならば云々せむ。されど、今はそれも叶ひ難し。されば、われは只、義朝をたよらむとやうに續けて説くべし。合期とは、思ふやうになる、或は思ひよく叶ふなどいふ意なり。

(五三頁) ●天氣 天皇陛下の思召なり。●三浦介 相模介といふべきなれど、相模の三浦に居たれば、かくいへるなり。●義明 平盛繼の子。●重能 平重弘の子。●有堂 重能の弟なり。

(五四頁) ●西坂本下松 西坂本は、山城國愛宕郡修學院村邊をいふ。東坂は、近江にあり、それに對したる名なり。さがり松は、修學院村、字一乗寺の一名なり、古、枝垂松ありし故、この名起れりといふ。

(五五頁) ●致仕 七十歳の事なり。『禮記』に、大夫七十而致仕とあるより起れり。

(五六頁) ●四鳥の別れ 親子別々になること。『孔子家語』五の卷に、回聞、桓山之鳥生四子焉、羽翼既成、將分于四海、其母悲鳴而送之、哀聲有似於此云々と見ゆ。桓山は、齊魯の

間にある山なり。●廣劫 長き時間といふことにて、劫は世と同じ『楞嚴經』に、儒に世と釋に劫と、道に塵と見えたり。●釣魚の恨 魚の父子兄弟一處に集り居たるに、人に釣られて各離散するが如き恨をいふ。故事にあらず。●欄干 関干と同じく涙の流るるさまなり。白樂天の詩に、玉容寂寞淚闌干など見ゆ。●小原 山城國愛宕郡にあり、舊大原の莊といへるは、八瀬村より北方をさせり、古より大原とも小原ともいへり。●靜原 大原村の西なり、今は靜市野村の内なり。●芹生の里 小原と靜原との間にあり。●鞍馬 鞍馬村は、京都の北三里にあり。●貴舟 鞍馬寺の西北十町に僧正が谷あり、その處より北へ下る事、二十五丁許の處に貴船村あり。

〔五七頁〕●巴猿 猿のことなり、支那の巴蜀の地には猿多ければいふなり。『和漢朗詠集』に、胡雁一聲秋破、商客之管、巴猿三叫曉、露行人之裳と見えたり。●糺の森 愛宕郡下鴨村の南に糺といふ處あり、また川合ともいふ、この地の森なり。●陸月 あひ睦べはいふといひ、或は生月ウツキの約、春陽發生の意といふ、陰曆正月の異稱。●谷の戸のはつ音 鶯の事、『新拾遺』に、鶯の谷の戸出でしあしたより外山の霞立たぬ日はなし。

〔五八頁〕●しる人のたぐひならねど 『古今集』梅の花を折りて人におくる、紀友則君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知るとある歌に則れるなり。

〔五九頁〕●まらうど 稀人ヒトの音便、轉じて、常に家に居らぬ人の意、また他より訪ひ來れる人の稱、即ち賓客のことなり。●律師 僧官、僧都につぎて正權あり。五位に准ず。約めてリシとよむ。

〔六〇頁〕●間宮永好 水戸の人、松の屋と號す。小山田與清の門に入りて學び、和歌に長じ、筆札に妙なりき。明治の初年、神祇大史に任せられ、明治五年正月三日歿す、年六十八。

〔六四頁〕●松が浦島 『後撰集』素性法師の歌に、音にきく松が浦島けふぞ見るうべ心あるあまも住みけるとあり。

〔六六頁〕●あれども無きが如くす 『論語』に、曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校、昔者吾友嘗從事於斯矣、とあり、謙遜の徳をたたへたる語なり。●馬進まず 『論語』に、子曰、孟之反不伐、奔而殿、將入門、策其馬曰、非敢後也、馬不進也とあり、なほ『左傳』哀公十一年の條にくはし、これも謙讓の徳の高きをいへるなり。

〔六七頁〕●近松門左衛門 本姓は杉森氏、名は信盛、巢林子平、安堂、また不移山人と號す。長門國萩の人、或は越前國の人とも三河國の人ともいふ。有名なる淨瑠璃作者にて、古學に精しく、その作靈妙巧緻にて、よく人の心を感動せしむ。曾我會稽山、女殺油

地獄國姓爺等の戯曲最も名あり、人情の極秘を敍するに方りて遺漏なし、日本のセーキスピアといふ。享保九年十一月歿す、年七十二。●浄瑠璃 俗間の歌謠の名、昔し、三河の矢矧の驛に、兼高長者といふものありて、浄瑠璃薬師に祈りて、一女を得て、浄瑠璃と名づけぬ。後、永祿中、織田信長の侍女小野お通、かの女の源牛若と契れる事ありしを、『浄瑠璃物語』として十二段に作れるを、慶長中、岩船檢校、琵琶に合せて語り廣めたり。その後、別に種々の物語を作出し、歌曲も漸く數派に分れぬ。されど、なほ浄瑠璃節とよびて、およそ三味線に合する語物の總名となれり。今専ら義太夫節の稱となれり。

(七〇頁)●胡頹子 グミとよむ、菜莢とも書く、夏の頃、花を開き、實は熟して赤くなる。今、蚊の血を吸うて赤くなれるに譬へたるなり。●三昧 梵語にて、正定、正受、平等など、と譯す。佛教の語にて、思を專にし、想を寂むること、心を一所に住めて移らぬことをいふ。

(七七頁)●神別皇別蕃別 わが國上古の族制なり。神別は、神代より有勳の臣民をいふ。則ちその族の祖先は、神代の諸神より出でたるものなり。皇別は、神武天皇以來、皇統より岐れ出でて、臣下の列に入りたるものなり。蕃別は、外國人の歸化したるもの

の子孫をいふ。これらのものは、嵯峨天皇の時に、姓氏の亂れたるを正すために設けられたり。萬多親王の『新撰姓氏錄』には、この三大區別をたつ。

(八四頁)●防人 筑紫の海の崎を守る義かといふ。或はいふ塞守セキキの義かと、古へ軍團の兵を筑紫太宰府に送りて備へられしもの、三年にて交番す。壹岐對馬などには、島守シマキと記す。●肩カミのまよひ 肩の綻びたるをば、誰かとり繕ふ人あらむといふ義。

(八六頁)●萬葉古今 『萬葉集』は、撰者詳ならず、普通の説には、橘諸兄撰し、大伴家持補ふと。本朝最も古き歌集にて、奈良時代の歌をあつめたるものなり。『古今和歌集』は、醍醐天皇の延喜五年、詔を奉じて、紀貫之、紀友則、大河内躬恒、壬生忠岑等の撰みたるものにて、勅撰歌集のはじめなり。●寺澤文滋 阿波徳島の藩醫にて、同藩士早川清魚の門人、歌道に名あり。●三田葆光 徳川幕府の士にて、明治の初、神祇官に奉職し、後、女子高等師範學校の教師となる。今現に正六位たり。●加藤里路 加賀藩前田家の舊臣なり、各社の宮司に補せられ、伊勢の皇學館の教師をも勤めたり。今郷里加賀に歸り居らるといふ。●武谷水城 陸軍省の人、歌道に熱心にて、咏歌頗る賞すべきものあり。

(八八頁)●小林大茂 因幡鳥取の士。天保の末より嘉永、安政頃にありて、歌人の名あり。

りき。
(八九頁) ●三村安臣 常陸笠間藩の人。走卒より權大參事に至り、商業に失敗して、東京に來り、宮内省圖書寮に勤む。數學および語學にくはしかりき。明治二十五年五月二十一日歿しぬ。年五十八。『新鏡』『後の悔』の著あり。 ●鳥山啓 紀伊田邊藩の士なり、目下華族女學校の教師たり、最も新題の和歌に長ず。

(九一頁) ●骨董 古董と同じ、雜器なり、霏雪錄に、骨董乃方言、初無定義、東坡嘗作骨董羹とあり。骨董羹とは、食料を雜へ煮たるものをいふ。『朱子語類』に、只作汨董とあるは骨董なり。

(九四頁) ●月見ればの歌 『古今集』秋の部大江千里の歌なり。

(九六頁) ●江畔何人の詩 張若虛、春江花月夜篇、その原詩に曰く、春江潮水連海平、海上明月共潮生、灑々隨波千萬里、何處春江新月明、江流宛轉遷芳甸、月照花林皆似霰、空裏流霜不覺飛、江上白沙看不見、江天一色無纖塵、皎々空中孤月輪、江畔何人初見月、江月何年初照人、人生代々無究己、江月年年望相似、不知江月照何人、但見長江送流水、白雲一片去悠悠、青楓浦上不勝愁、誰家今夜扁舟子、何處相思明月樓、可憐樓上月徘徊、應照離人粧鏡臺、玉戶簾中捲不去、搗衣砧上拂還來、此時相望不相聞、願逐月華流照君、鴻

雁長飛、光不度、魚龍潛躍水成文、昨夜聞潭夢落花、可憐春半不還家、江水流春去欲盡、江潭落月復西斜、斜月沈沈藏海霧、碣石瀟湘無限路、不知乘月幾人歸、落月採情滿江樹。 ●張若虛 初唐の終期にて、最後の光芒を煥發せる詩人にて、賀知章、包拯、張旭等と共に吳中四士の稱あり。その作、春江花月夜一篇は、初唐中第一品の稱あり、その思想の豊富なる、その筆力の靈妙なる、まことに人をして神怡び意暢ばしむ。 ●衛萬 唐朝の詩人にて、その詩『唐詩選』に載せたり。 ●勾踐城中の詩 吳宮怨詩中の句なり。その全詩は、君不見、吳王宮闕臨江起、不捲珠簾見江水、曉氣晴來雙闕間、潮勢夜落千門裏、勾踐城中非舊春、姑蘇臺下起黃塵、祗今惟有西江月、曾照吳王宮裏人なり。
(九七頁) ●李太白 唐玄宗皇帝の時の人、名は觀、また長庚といふ。字は太白、みづから青蓮居士と稱す。劍撃を好み、詩賦をよくし、杜甫と並べ稱せらる。七言絶句の如きは、唐朝第一にて、その他の諸篇、また絶妙のもの甚だ多し。蓋し天才絶倫にて、詩賦ありてより一人と稱せらる。應寶元年歿す、年六十四。 ●青天月ありの詩 把酒問月の全詩は、青天有月來幾時、我今停盃一問之、人攀明月不可得、月行卻與人相隨、皓如飛鏡臨丹闕、綠烟滅盡清輝發、但見霏從海上來、寧知曉向雲間設、白兔搗藥秋復春、嫦娥孤栖與誰隣、今人不見古時月、今月曾經照古人、古人今人若流水、共看明月皆如此、惟願當歌對

酒時、月光長照金樽裏。

(九九頁)●誰家今夜の詩 張若虛、春江花月夜詩中の句なり、前に出だせり。●ハイネ
H. Heine は、獨逸の有名なる詩人にて、その雄篇大作は、世界に傳稱せらる、一千七百九
十九年生れ、一千八百五十六年歿す。

(一〇三頁)●尋常一樣窓間月、纔有梅花便不同 この詩の起承は、寒夜客來茶當酒、竹
爐湯沸火初紅なり、題は寒夜といふ。

(一〇五頁)●チロル Tyrol は、オーストリア、ハンガリー國の西端にあり、瑞西、伊太利
と境を接し、山間の風光甚だ佳絶なり。

(二〇九頁)●ヴェスーヴィオ Vesuvio は、伊太利の中央西端にある噴火山なり。

(一一〇頁)●和漢朗詠集 藤原公任の撰、和漢才子の詩歌を採集したるもの、但し和
歌は、後人の加へたるものなりといふ。●小野道風 醍醐朱雀村上の三朝に歷事し、
正四位、内藏權頭に陞り、尤も醍醐天皇に寵せらる。書をよくし、遑勁靈妙にして、今古
に比なし。藤原佐理、藤原行成と共に、世に三蹟と稱せらる。康保三年歿す、年七十一。●
御相傳うけること 御相傳について、浮きたる事、即ち疑はしきこととはあるまじけ
れどといふ義。

(一一一頁)●凶宅の詩 白氏文集(二)凶宅の篇五言古詩中に、權重持難久、位高勢易窮、
驕奢物之盈、老者數之終」とあり。●杏爲梁 同集(四)杏爲梁の篇七言古詩中に、儉存奢
失今在目、安用高墻圍大屋」とあり。●吳王夫差の姑蘇臺 『史記』吳世家に、吳王夫差破
越、越進西施、請退軍、吳王許之、既得西施、甚寵之、爲築姑蘇臺、高三百丈、游宴其上、子胥諫
曰、臣恐姑蘇不久爲麋鹿之遊、後越伐吳、遂見焚」とあり。夫差は、吳王闔廬の子なり。●秦
の始皇帝の咸陽宮 『史記』秦本記に、秦每破諸侯、寫其宮室、作之咸陽北坂上、以東至涇
渭、殿屋複道、周閣相屬、所得諸侯美人、鐘鼓、以充實之、後項羽屠咸陽、焚其宮室、三月火不
滅」とあり。始皇帝、名は政、莊襄王の子、實は相國呂不韋の子なり。始皇天下を并せて、始
めて帝と稱し、咸陽に都せり。●源順が河原院の賦に云々 『本朝文粹』に、奉同源澄才
子河原院賦、源順とていでたる賦中の句なり。河原院は、『拾芥抄』に、六條坊門南方里小
路東八町融大臣家、後寛平法皇御所、本四町、京極西、號東六條院」とあり。左大臣源融こ
れを興し、臺閣水石、巧に華詭を窮め、鱗介を取りて、池中に致し、毎月難波の潮二十解
を吸ましめ、日に鹽を煮て、陸奥鹽釜浦の勝概に模す、世に河原左大臣と稱す、薨する
に及び、これを宇多天皇に献じ、仙洞となすといふ。本文は、河原院を姑蘇臺、咸陽宮に
比して、暗に源融が驕奢をきはめたるを難せしなり。荆棘とは、うばらの類、滾々とは、

露の濃なる貌『詩經』に、零露漙々などあり、狼虎とは、秦の強暴なるに喩ふ、『史記』に、秦虎狼不可信、『戰國策』に、秦四塞之國、有虎狼の心などあり。

(一一二頁) ● 都良香 左京の人、祖は桑原秋成、父は貞繼、弘仁中、兄腹赤と請ひて、姓を都宿稱と改む、博聞強記にて、善く文を屬し、對策及第して、聲譽益著はる、累進して從五位下、大内記文章博士兼、越前權守となる。元慶三年卒す、年三十六。● 羅城門 内裏の朱雀門とあひ對して、その南なる大門の名、『拾芥抄』に、羅城門二重閣七間と見ゆ。● 氣霽風梳新柳髮の詩 『江談抄』に、内宴、春暖、都良香、故老傳云、彼此騎馬人、月夜過羅城門、誦此句、樓上有聲曰、阿波禮、阿波禮、文之神妙、自感鬼神也とあり。この句また『和漢朗詠集』早春にも出でたり、二句の意は、風梳新柳髮とは、柳の若枝の風になびくさまをいひ、浪洗舊苔鬚とは、古びたる苔の池浪にただよふ状をいふなり。● 前途程遠の詩 この詩は、前卷に詳解せり。● 後江相公 大江朝綱のことなり、大江音人の孫、學問淵博、詞賦典麗にして、その詩傳譽せられ、芳名異域に轟く、また書法をよくし、小野道風と及び稱せらる。村上天皇の勅を奉じて、『新國史』『坤元錄』を撰めり、天徳元年卒す、年七十二。

(一一三頁) ● 文章按轡駒過影の詩 上句文峰とは、なほ詞峯といふが如し、作文の所

を峯に喩へたるなり。王勃山亭興序に、下官以詞峯直上の句あり、按轡とは、轡をおさへて行きやらぬ心なり。白駒影とは、『莊子』に、人生天地之間、若白駒之過郛、忽然而已。『前漢書』魏豹傳に、劉澤謂張良曰、人生一世間、如白駒過隙耳。『索隱』に、小韻云、白駒謂日影也、隙、壁隙也、以言速疾若日影過壁隙也など見ゆ。下句詞海とは、詩の境を海に喩へたるなり。元稹の詩に、詞海跳波湧の句あり、艤船とは、舟をととのへて將に出ださむとするをいふ。『前漢書』項羽紀に、烏江亭長艤船而待項王とあり。紅葉聲とは、落葉の水に浮べるを、秋の神即ち青帝の乗りてゆかむとする舟によそへたるなり。● 後中書王 具平親王と申す、村上帝の皇子、中務卿におはしければ、人呼びて中書王と申せり。中書は、唐名にて、本朝の中務の官にあたればなり。さて、醍醐帝の皇子、兼明親王も中務卿になり給ひしかば、前中書王と申し、それに對して具平親王を後中書王と申ししなり。

(一一四頁) ● 一唱三嘆 『禮記』に、清廟之瑟、朱絃而疏越、一唱而三嘆、有遺音者矣と、陳註に、此聲初發、一唱之時、僅有三人從而和之、言者和者少也、以其非極聲音之美、故好者少、然而其中則有不盡之餘音存焉、故曰有遺音者矣とあり。● もも千鳥 『古今集』春の部、よみ人しらすの歌。● 春のよの 『古今集』春の部、大凡河内躬恒の歌。● 世の中に云々

『伊勢物語』にあり、業平の母の歌、老いぬればさらぬ別のありといへばいよいよ見まほしき君かなといふに業平の答へたる歌なり。

(一一五頁) ●風吹けばの歌 『伊勢物語』にあり、業平の妻のよめる歌なり、業平、この歌に感じて、夜遊びすることを止めたりといふ。●忘れてはの歌 『伊勢物語』にのせたり、業平の親しく仕へ奉りし惟喬親王が、思ひの外に皇位を継ぎたまはで出家せられ、叡山の麓なる小野におはしましけるを、正月に訪ひまゐらせてよめる歌なり。●八代集 『古今集』後撰拾遺 『後拾遺』『金葉』『詞花』『千載』『新古今集』をいふ。●武士の矢なみ云々の歌 この歌は、『金槐集』に霞の題にて見えたり、賀茂真淵の評に、軍にたちて負ふ征矢のみだれをなほすとして、眞手をかたへやりたる、その小手をあられのうちたばしらむさま、人麿のよめらむ勢なりとありて、勇壯なる歌なり、矢なみは、矢列なり。ここは、籠手の字をかきて、手蓋の武具なり。

(一一六頁) ●金革をしきねにする 『中庸』に、衽金革死而不厭北方之強也、強者居之と。註に、衽、席也、金、戈兵之屬、革、甲冑之屬とあり。●ひさかた 『新古今集』春の下、紀友則の歌なり。

(一一七頁) ●朝日かげの歌 『新古今集』春の上、有家の歌。●うちしめりの歌 『新古今

集』夏の部、藤原良經の歌。●庭の面の歌 『新古今集』夏の部、源三位頼政の歌。●秋風にの歌 『新古今集』秋の部、左京大輔顯季の歌。●津の國の歌 『新古今集』冬の部、西行法師の歌。

(一一八頁) ●駒とめての歌 ここは、『万葉集』に、くるしくもふりくる雨かみわが崎さののわたりに家もあらずとあるによりて、定家の作りなせるなり。『尾張の家苞』に、釋していはく、この歌、旅行の歌にあらず、夕ぐれといひても宿かる意はなし、夕ぐれは折からのわびしきなり、晴たる日、かりそめに物へ行きてかへるさに、俄に雪にあひしなり、雨衣などの心しらひもなきに袖うちらはらふとて、立よるべき蔭もなくなどして、わびしき狀を盡したるなりと、佐野は大和にあり。

(一二一頁) ●達磨大師 達磨は梵語、法の義なり、天竺の僧の名、支那に入りて、梁の武帝に見え、江を渡りて魏の少林寺に入れり、世にその緋衣をきて、面壁坐禪したる像を畫きて種々の象に用ふ、春の日や云々は川柳の句なり。

(一二二頁) ●抒情詩人 詩人に唯自然の美を謠ふものあり、山部赤人の如く、ウォルヅォルスの如し、また人情の極美を謠ふものあり、柿本人麿の如く、テニソンの如し、後者を抒情詩人といふ。●青春朱夏白藏玄冬 青春は、春陽の青々たるをいひ、朱夏

は、夏氣の盛んなるをいひ、白藏は、秋の白氣收藏するをいひ、玄冬は、冬の黒氣清英なるをいふ。單に春夏秋冬といはむより、青春朱夏白藏玄冬といふ方、壯大に聞ゆ。

(二二三頁)●梅一輪 服部嵐雪の句なり。●煩惱 佛經の語、人世の慾情願望苦慮等の煩はしく惱ましきことの泛稱、佛道にて最も嫌ひ棄つべきものとす。(菩提の正覺に對す)

(二二四頁)●紅葉は二月の花 杜牧の句なり、本書十の卷廿頁の註に出だせり。●涅槃梵語不生(涅)不滅(槃)の義、多くは釋迦の入滅にいふ。

(二二五頁)●年の内への歌 『古今集』開卷第一、在原元方の歌なり。●刹那 梵語、佛教にて時の極めて短きの稱、壯士の一彈指の間をいふとぞ、極めて長き劫に對す(百二十を刹那といひ、其六十を臘縛といひ、その二十を牟呼栗多といひ、その五十を一時とし、六時を一日夜とす)。

(二一八頁)●鳥の跡 支那黃帝の時、蒼頡といふもの、鳥の跡を見て、始めて文字を作したりと稱せらる、よりにて文字の事を鳥の跡といふ。ここにては、文通することにいへり。●まどの雪 孫康の故事を含ませたり。この歌の全篇は、高等師範卒業式の際の馳走に出でたるものの物名をよみ入れて作られたるものなれば、唯單に文のあ

やにてつづられたるものと思ふべからず。なほこの歌の中にかけ語にてあやをなしたるもの甚だ多し。およそかけ語は、前卷太平記の落花の雪などの文にもありしが如く、あまりくだくだしては、興も淺けれど、この語法は、支那西洋諸國にもなきものにて、ひとりわが國文學の美觀たり。西洋にていふかけ語は、ボンといひて、わが國の駄洒落の如く、極めて野卑なるものなり。日本文學上のかけ語とは、同日の論にあらず。

女子國語新讀本教授參考用書

二百八十二

女子國語新讀本教授參考用書終

明治三十六年四月廿一日印刷
明治三十六年四月廿四日發行

女子國語新讀本教授參考用書全一册與付

(非賣品)

著者

株式會社普及舍編輯所

發印
行刷
者兼

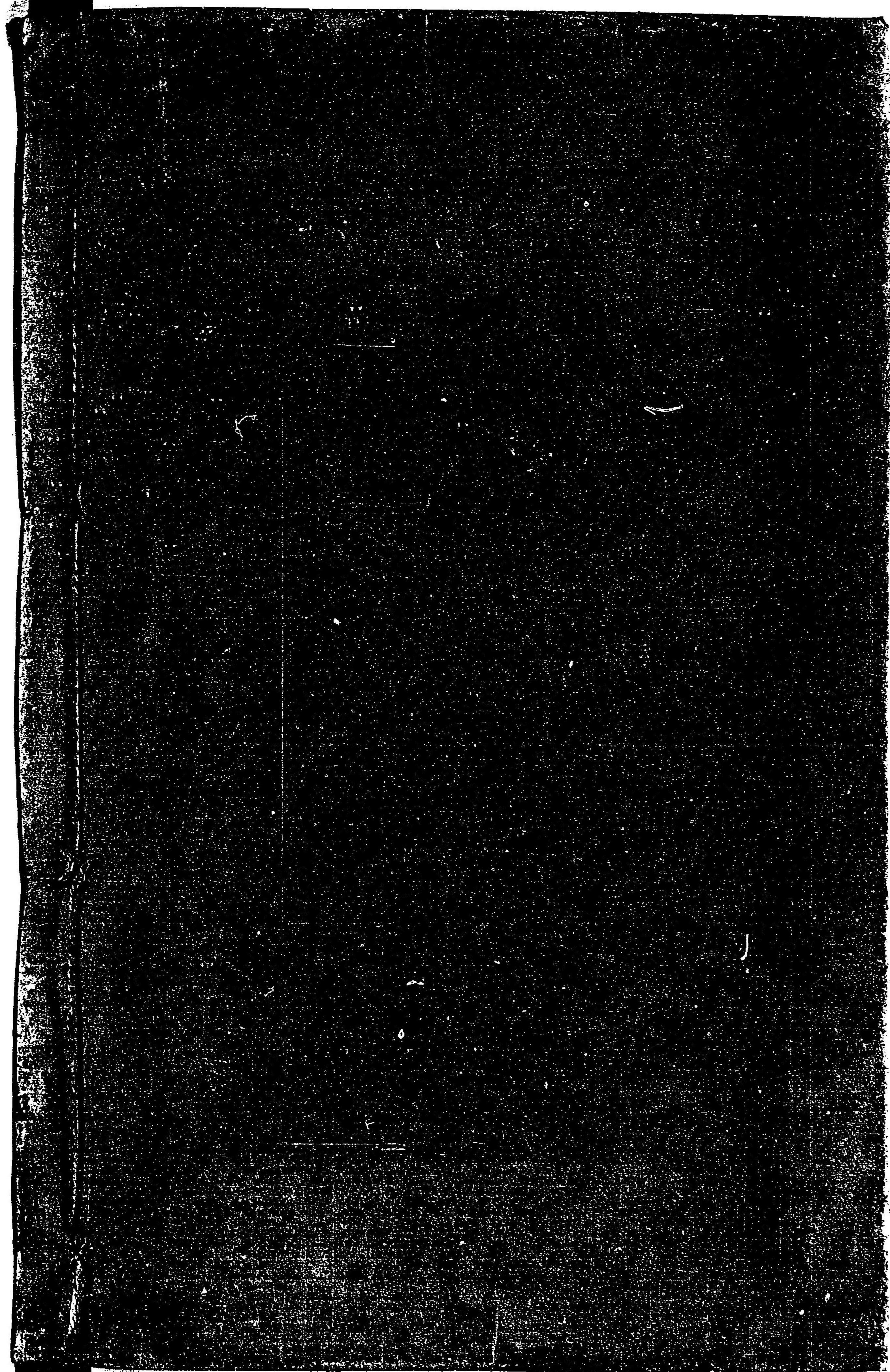
東京市日本橋區吳服町一番地
株式會社普及舍

代表者

取締役

中川九郎

不許複製



048289-000-1

特26-472

女子国語新読本教授参考用書

普及舎

M36

BEF-2320

